

山梨県北巨摩郡大泉村

宮地第2遺跡

宮地第3遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1991・3

大泉村教育委員会  
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡大泉村

宮地第2遺跡  
宮地第3遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1991・3

大泉村教育委員会  
峡北土地改良事務所

## 序 文

本書は平成2年度の泉宮園場整備事業に伴い実施された宮地第2遺跡、第3遺跡の発掘調査報告書です。

村内での園場整備事業は十余年の歳月をかけ、余す所残り少なくなりましたが、これは逆に発掘調査の歴史でもありました。金生、寺所、天神、城下、東原、蛇神といった遺跡は全て園場整備に伴う発掘調査を実施した遺跡で、県内でもその時期を代表する重要な遺跡であることが解りました。これらの遺跡は金生遺跡を除くとほとんどの遺跡が大部分を破壊されてしまい記録と遺物という形でのみ残されています。

今回調査された両遺跡も同様ですが、その記録を一早く公にし、皆様に遺跡のことを理解していただく事は重要な意味があると思われます。ここに上梓される運びとなったこの調査報告書が村民の方々に広く活用されることを望むと共に、考古学、郷土研究の参考に供していただければ幸いです。

最後に調査及び整理に関わった皆様、関係諸機関の皆様に対して厚く御礼を申し上げます。

平成3年3月

大泉村教育委員会

教育長 三井高秀

## 例 言

- 1 本書は平成2年度県営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本調査は岐阜土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。
- 3 調査の対象となった遺跡、調査期間、調査面積は以下のとおりである。  
宮地第2遺跡（山梨県北巨摩郡大泉村西井出1793他）  
平成2年7月2日～12月1日 2914㎡  
宮地第3遺跡（山梨県北巨摩郡大泉村西井出1719他）  
平成2年7月10日～9月20日 6380㎡
- 4 本書の執筆、編集は伊藤が行なった。ただし石器については浦志 恵（明治大学）の観察結果を伊藤がまとめたものである。
- 5 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御助言、御教示を賜わった。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）  
兩宮正樹 大森隆志 榑原功一 末木 健 新津 健 米田明訓
- 6 本調査の出土品、諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。
- 7 調査にあたった組織は以下のとおりである。  
調査主体者 三井高秀 大泉村教育委員会教育長  
調査担当者 伊藤公明 大泉村教育委員会主事  
事務局 大泉村教育委員会  
調査参加者（敬称略、五十音順）  
相吉よしえ 浅川久代 浅川洋子 浦志真孝 浦志 恵 斎藤かずみ 進藤さく枝  
平井仁志 藤森かねよ 藤森佐喜子 藤森さち子 藤森里美 藤森秀子 藤森八千代  
細田絹代 二井種子 三井光恵

## 凡 例

- 1 本書使用地図は国土地理院発行のハッ岳、韭崎、谷戸及び大泉村地籍図である。
- 2 遺跡平面図の方位は磁北による。焼土、礫の被熱範囲はドットのスクリーン・トーンで示す。また断面図中の礫の輪廓の入っていないものは調査がその下まで及んでいないことを表し、基準線の下の数字はその標高を示す。これは同一図版中は原則的に統一しており、これ以外は全て表示してある。

# 目次

序文 .....	i
例言 .....	ii
凡例 .....	iii
目次 .....	iii
第1章 調査の概要 .....	1
1 調査に至る経緯と経過 .....	2
2 遺跡の位置と環境 .....	2
3 調査地点の選定 .....	2
第2章 宮地第2遺跡の調査 .....	5
1 遺跡の概要と調査の経過 .....	6
2 調査の結果 .....	6
1 層序 .....	6
2 発見された遺構と遺物 .....	6
1 住居址とその遺物 .....	8
2 地下式塋とその遺物 .....	23
3 土塋とその遺物 .....	30
4 その他の遺構と遺物 .....	45
a 堀立柱建物址と欄列 .....	45
b 小竪穴 .....	47
c 溝状遺構 .....	47
d 包含層、遺構外出土の遺物 .....	48
3 小 結 .....	48
第3章 宮地第3遺跡の調査 .....	49
1 遺跡の概要と調査の経過 .....	50
2 調査の結果 .....	50
1 層 序 .....	50
2 発見された遺構と遺物 .....	50
1 住居址とその遺物 .....	53
2 土塋とその遺物 .....	56
3 その他の遺構と遺物 .....	64
a 溝址 .....	64
b 包含層 .....	66
c 遺構外出土の遺物 .....	66
3 小 結 .....	69
参考文献 .....	70

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査に至る経緯と経過

平成2年度県営場整備事業に伴い、村内では宮地工区約8万㎡が開発される予定となった。この地区内では周知の遺跡として西井出1793を中心に宮地第2遺跡が、西井出1719を中心に宮地第3遺跡が所在している。村教育委員会は両遺跡の範囲の確認と内容の把握及び他の遺跡の所在の確認を目的として平成2年1月11日～1月26日にかけて開発予定地をほぼ網羅するように試掘調査を行った。その結果、工区内に実に23、600㎡にわたり遺跡が展開していることが解った。この結果を受け山梨県教育庁文化課、峡北土地改良事務所と協議を行い本調査を実施することになった。

以下文書の流れを概す。

平成2年5月29日付け、補助金交付内定を受ける。

平成2年6月1日付け、補助金交付申請書提出。（文化庁長官宛）

平成2年9月14日付け、同交付決定を受ける。

平成2年5月23日付け、埋蔵文化財発掘調査費に関する負担協定締結。（峡北土地改良事務所）

## 2. 遺跡の位置と環境

大泉村は山梨県の北限に位置し、八ヶ岳南麓台地のほぼ中央に位置する。村内の地形は標高1,000m～1,200mを境に、以上の八ヶ岳山体部とそれ以下の山麓緩斜面部とに大きく二分できる。また、この地点に端を発する多数の湧水があり、後者にはこれらによって開析された南北に細長い椀せ尾根が連続している。今回調査した両遺跡はともにこの様な椀せ尾根の上に立地した集落遺跡である。

第1図に大泉村周辺で発掘調査された主な縄文時代の遺跡の位置を提示した。ほとんどが開発に伴う緊急発掘調査であり、地形的な立地や分布を的確に表現するものではないが、八ヶ岳南麓台地に縄文時代の遺跡の多いのが窺える。第2図には遺跡の位置と周辺の発掘調査された位置の分布を示したものである。縄文時代の他、平安時代～中世の遺跡が濃密に分布している。

## 3. 調査地点の選定

調査地点の選定は試掘調査により明確となった遺跡の範囲の内、土地改良事務所から提示された計画図を基に、表土除去、施工に際し遺構面に影響のない部分についてはその対象から外した。また、表土除去により遺構面が露出する部分で盛土施工する部分については下部の遺構を破壊しないよう施工監理するという条件付きで調査の対象から除外した。



- 1 宮地第2遺跡 2 宮地第3遺跡 3 小坂遺跡 4 大和田遺跡 5 方城第1遺跡 6 姥神遺跡 7 東姥神遺跡  
 8 御所遺跡 9 山崎第4遺跡 10 天神遺跡 11 豆生田第3遺跡 12 金生遺跡 13 甲ヶ原遺跡 14 石堂B遺跡  
 15 石堂A遺跡 16 野添遺跡 17 西原遺跡 18 青木遺跡 19 御所南遺跡 20 川又南遺跡 21 栗原堂遺跡  
 22 清水端遺跡 23 続屋敷遺跡 24 別当遺跡 25 柳井遺跡 26 頭無遺跡 27 長坂上条遺跡 28 上平出遺跡  
 29 中原遺跡 30 沢の出遺跡 31 岩久保遺跡 32 教米石民部館跡 33 坂古屋遺跡 34 真原遺跡 35 向原遺跡

第1図 周辺の地形と遺跡の分布 (S = 1/100,000)





36 大和田第3遺跡 37 大和田第2遺跡 38 東原遺跡 39 谷戸城址 40 前林山十三塚 41 城下遺跡 42 寺所遺跡  
43 木ノ下・大坪遺跡 44 原田遺跡 45 別当十三塚遺跡 46 深草館跡 47 小和田館跡

第2図 遺跡位置圖 (S=1/25,000)

## 第2章 宮地第2遺跡の調査

## 1. 遺跡の概要と調査の経過

宮地第2遺跡は標高824m～829mを測る北→南に延びる幅90～100mの痩せ尾根の先端に立地した遺跡である。遺跡自体の広がりには縄文時代については試掘調査や表面採集の結果からこの尾根の先端部に限定されているが、平安時代の集落は後述する2号住居址、8号土壌の分布や、表土除去及び地形測量のみを行った調査区西南側の状況から沖積面まで広がっていることは確実である。また、近隣の民家の敷地に地下式墳が開口していることから中世の遺構も広範囲に及ぶことが判明している。

また、今回の調査区北側には天和3年(1683年)から明治5年(1872年)にかけて存続した神石山忠興寺があったとされ、これに関わるものと思われる遺構が検出されている。

調査は平成2年7月2日より表土を除去し、調査を開始したのは宮地第3遺跡の調査と一部併行して9月3日からである。平成2年11月19日調査を終了。その後12月1日にサンプリングを行い12月1日付け長坂警察署に埋蔵物発見届を提出。同日付け県教育長宛に保管証を提出。

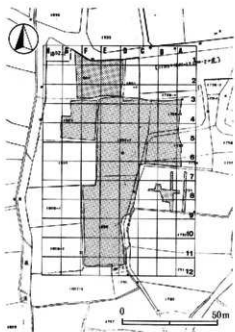
## 2. 調査の結果

### 1 層序

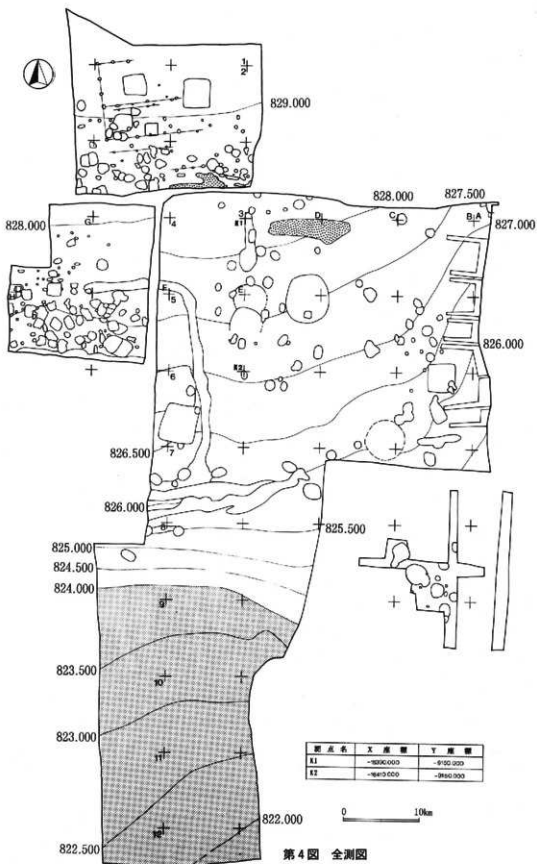
本遺跡の調査では尾根上は表土層の直下が遺構確認面(ソフトローム層)となっている。また、西側の水田部については一部で水田の止水層の下部に暗褐色土の堆積が認められた。この層は中世の遺物包含層である。また、調査区東側にトレンチを入れたがこの結果については後述する。

### 2 発見された遺構と遺物

宮地第2遺跡から検出された遺構は縄文時代中期住居址4軒、平安時代住居址3軒、中世地下式墳8基、土壌151基(縄文時代1基、平安時代1基、中世10基、近世12基、時代不明127基)、掘立柱建物址1軒、柵列2列、小竪穴3基、溝状遺構6条(中世1条、時期不明5条)その他小ピット多数である。遺物は縄文土器(前期～後期)、石器、平安時代土師器、須恵器、緑釉陶器、中世陶磁器、内耳土器、土師質土器、近世陶磁器、古銭等が出土しており、その量は整理箱に10箱程度である。



第3図グリッド配置図



第4図 全測図

## 1 住居址とその遺物

ここでは調査時の番号順に記述を進める。また1号住居址についてはB-8・9区に所在する3、4号土壌及び周辺の小ピットの検出状況から当初住居址として認定した。緩やかな壁状の立ち上がりをもつ落ち込みの内側に位置し、4号土壌がその中央に位置しており石囲炉状の形態をしていることからの認定ではあったが調査が進むにつれ如でないことが明確になったことから一連のものである可能性が高いがこれらを単独の上壌として扱うこととした。よって1号住居址は欠番となる。

## 2号住居地 (第5図)

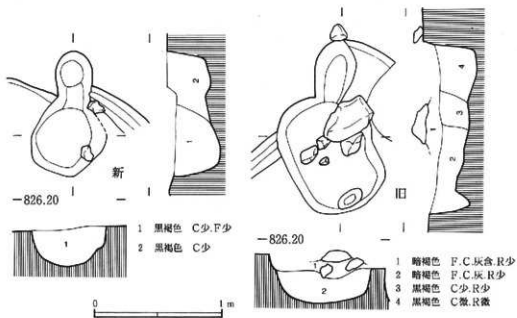
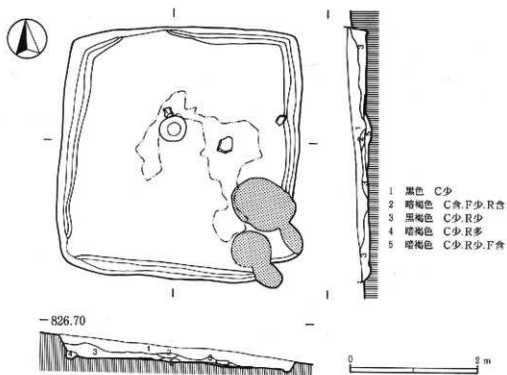
B-5・6区に位置する。尾根の東側斜面、沖積面との境界に位置する。

**形態** 略方形。規模・東西3.72m、南北3.98mを測る。床面 住居址中央から西半はローム層中に、東半は沖積層中に構築されている。レベル的にはほぼフラットであるが若干東下り、南下りに構築されている。またこの様な立地からか本遺跡中唯一部分的ではあるがローム土を中心とした土で貼り床が検出されている。(図中二点鎖線) 周溝 断続的ではあるがほぼ全周している。カマド 住居址南東コーナーに2基検出されている。上層観察及び貼り床の分布から南側の小さいものを新、北側のものを古として調査を進めた。規模は新カマドが59cm×99cm、古カマドが75cm×139cmを測る。また古カマドでは床面とほぼ同レベルから抽石が、この抽石の上から天井石が検出されているが新カマドでは検出されていない。埋土はともに焼土、炭化物共に散漫に分布しているだけで燃焼部の硬化は一切認められなかった。ピット 柱穴として認定できるものは存在しない。また、住居中央北よりに焼土、炭化物を伴ったものが検出されているが機能については不明である。遺物 図化できる遺物は存在しなかった。

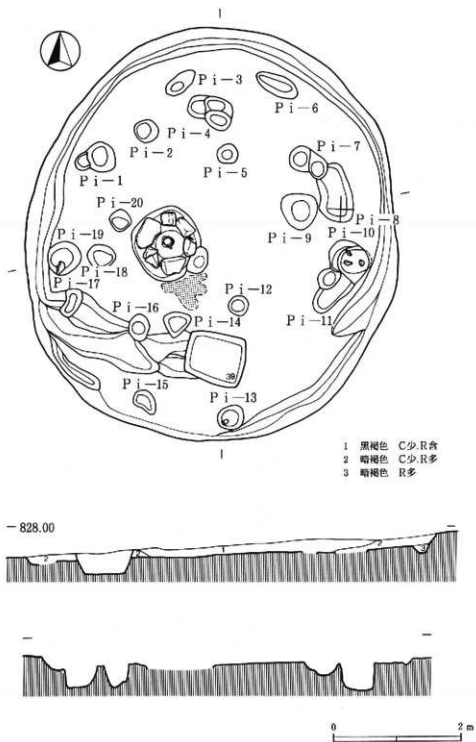
## 3号住居址 (第6図)

C・D-4・5区に位置する。住居中央の炉の直上に直径50cmを越す柿の木があったため、これから延びる根の処理のため作業に困難が伴ったが、他の住居址に比し表土流出が少なく、農耕機械の攪乱もほとんどなく多量の遺物が検出されている。

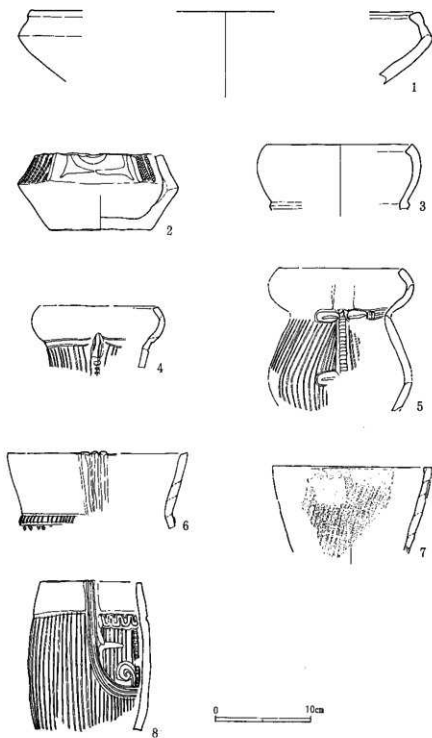
**形態** 胴張りの楕円形を呈する。規模 長軸6.42m、短軸5.86mを測る。床面 ローム層中に構築されている。前述の木の根の攪乱はあるがほぼフラットである。レベル的には若干南下りになっている。周溝 南側で断絶するほかは全周する。また南側の周溝の様子から2ないしは3度の住居の改修が考慮されるが柱穴状のピットが同心円状に分布するのに対し、周溝は南側のみ改修の痕跡がある。炉 円形の石囲い炉である。拳大～小児頭大の礎7個で構築される。これは後述する4、5、6号住居とは異なり円形のプランの内側に納め、後に石のレベルを合わせるために埋め戻されている。また、曾利土期の住居で一般的な石囲炉の南側(入り口側)に見られる地床がこの段階で成立しているのは特筆に値する。ピット 20本検出されている。内Pi-10は貯蔵穴と考えられる。また、Pi-13からは完形のミニチュア土器が検出されている。遺物出土状況 炉覆土内より第7図-2の上器が出土している他、炉



第5图 2号住居址



第6图 3号住居址



第7圖 遺物(1)



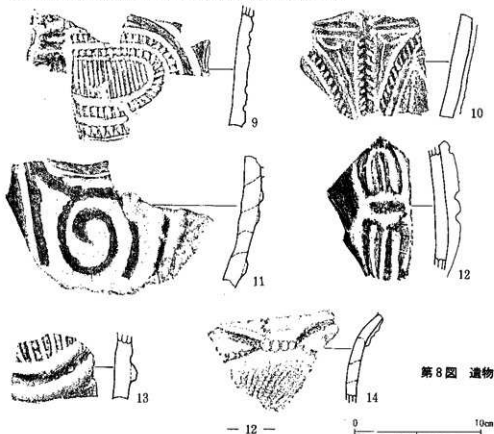
周辺床面直上から同図8の土器が出土している。また、全体の出土状況は覆土中の出土で概ねレンズ状に分布していた。また、5号住居址と一部接合関係が認められた。

遺物（第7～9図）

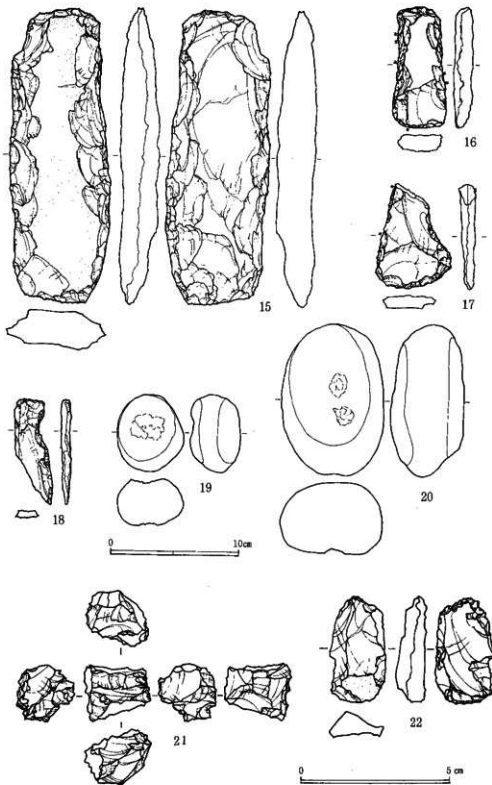
多量の遺物が出土しているが紙面の都合上一部を提示するに止める。

1は浅鉢の大型破片から器形を復原した。復原口径は40cmを1.1回る。丁寧にヘラケンマされ、内部の一部に赤彩の痕跡が残っている。2は屈折底の深鉢底部である。屈折部の上部は単節R.L.施文後隆帯貼付け及び沈線が施文されている。残存部位は略完形、二次的な使用も考慮される。3～6は口縁部が受口状を呈する深鉢である。7は底部から外上方へ内湾ぎみに立上がる深鉢である。5号住居址と一部接合関係がある。8は砲弾形を呈する深鉢で条線施文後に隆帯の貼り付け、沈線の施文が見られ、これの後一部条線を引き直している。15は大型の打製石斧である。最大長23.0cm、最大幅8.1cm、最大厚3.1cmを測る。覆土上層から出土している。16は最大長9.4cm、最大幅4.1cm、最大厚1.5cmを測る打製石斧である。18は人型粗製の縦型石匙の断欠である。粘板岩製。20は安山岩製の磨石で最大長11.9cm（現存長）、最大幅8.1cm、最大厚5.6cmを測る。両面に凹みを有する。21は黒曜石の石核である。最大長2.2cm、最大幅1.9cm、最大厚1.9cmを測る。22は楔形石器である。最大長3.5cm、最大幅2.9cm、最大厚1.0cmを測る。黒曜石製である。

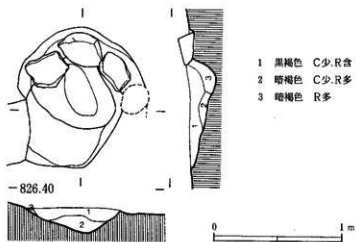
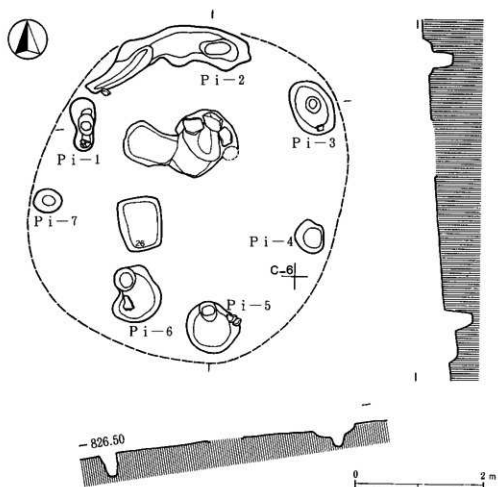
これら土器、石器以外に土偶の足の破片2点が出土している。



第8図 遺物（2）



第9圖 遺物(3)



- 1 黑褐色 C少,R含
- 2 暗褐色 C少,R多
- 3 暗褐色 R多

第10图 4号住居址

#### 4号住居址 (第10図)

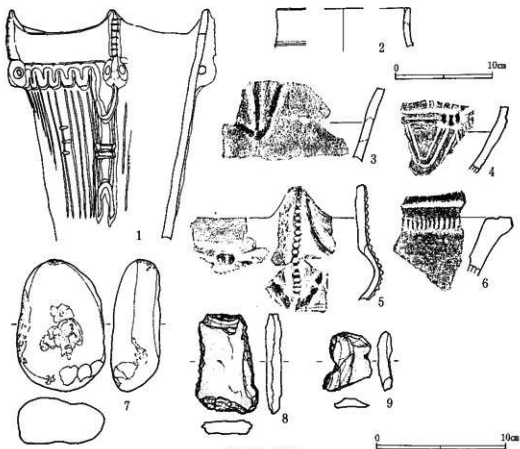
B・C-6・7区に位置する。重機による表土除去作業中に表土直下から石囲い炉を検出。その後の精査で柱穴状のピットを検出し4号住居址と認定した。

形態 楕円形であろうか。床面 炉石の存在することから炉の位置より斜面上部は残存することが明らかであるが下半は不明。周溝 不整であるが住居北側の一部で検出されている。炉 西側を一部覆乱されている。炉石は北側で3個のみ検出されている。構築方法は燃焼部を掘った後その上部に石を並べており、掘り方は石の面を揃える為極く浅く掘られるだけである。ピット 7本検出されている。内Pi-6は埋土中から小片ではあるが多数の土器片が出土しており貯蔵穴と考えられる。

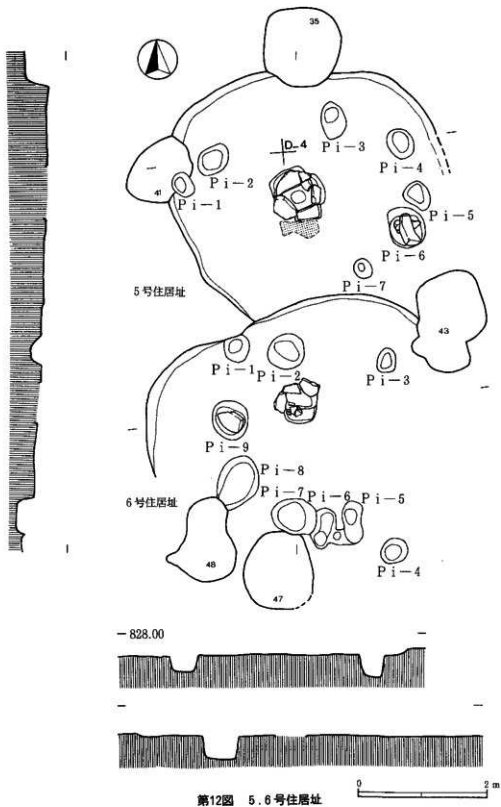
#### 遺物 (第11図)

ここに提示したのは全てPi-6出土のものである。他に図化できる遺物は出土していない。

1は深鉢で1/4個体の破片から復原している。条線施文後に隆帯の貼り付け、沈線の施文を行っている。4・5は小型の広口壺、6は浅鉢の破片である。8は打製石斧で階段状剥離が見られる。ホルンフェルス製である。9は大型の縦型石匙である。



第11図 遺物



第12图 5.6号住居址

#### 5号住居址(第12図)

D・E-4・5区に位置する。試掘調査時に石囲い炉、一部住居立上がりを確認している。今回改めて5号住居址として調査を進めた。南接する6号住居址との先後関係は不明である。35、41号土壌に切られる。

**形態** 不整形円形であろうか。床面 ほぼフラットで、若干南下がりである。炉 石囲い炉である。構築方法は4号住居址と同様である。使用されている石からであろうか方形プランとなっている。焼土、炭化物の分布は少量で地山の赤化、硬化は認められない。また、石囲い炉の南側に地床炉が存在する。(第15図)ピット 7本検出されている。内Pi-6は貯蔵穴であろう。中から作業用の台石であろうか最大長50cmを越す偏平な石が出土している。前述のとおり一部3号住居址出土遺物と接合関係がある。

#### 遺物(第13図)

1は大型の深鉢の大型破片から復原した。胴部に条線施文後に粘土紐貼り付け、沈線の施文が見られる。また、接合はしないが胴下半部の破片も出土している。2は屈折底を有する小型の深鉢である。粘土紐貼付け後に沈線文が施文される。3は口唇部~器外面に直線的に粘土紐を貼り付けたものである。8は浅鉢の口縁部片である。9は安山岩製の打製石斧である。粗製で刃こぼれが特に裏面に顕著に観察された。最大長10.9cm、最大幅5.7cmを測る。10は大型の縦型石匙である。石質は緑泥片岩である。最大長11.2cm、最大幅4.5cmを測る。

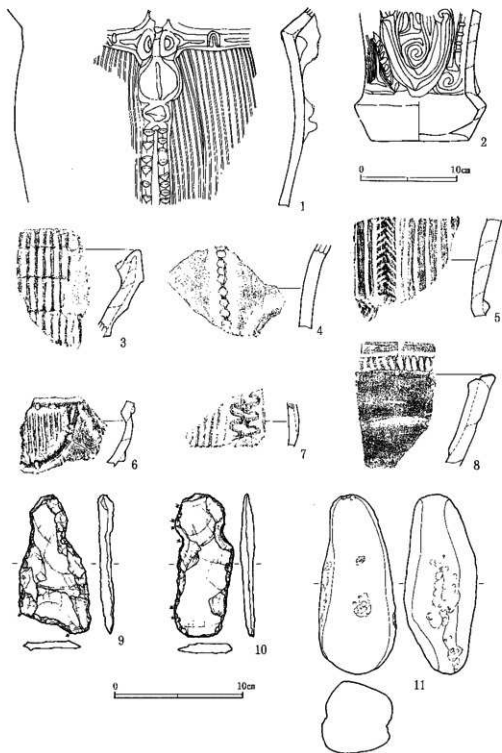
#### 6号住居址(第12図)

D・E-5区に位置する。5号住居址と切り合うが先後関係は不明。43、47、48号土壌に切られる。重機による表土除去作業中に石囲い炉を検出。その後調査を進め一部壁の確認と柱穴状のピットの検出により6号住居址として認定した。

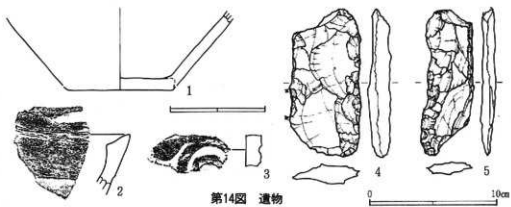
**形態** 不正円形であろうか。床面 炉以南は削平されている。残存部分は木の根の攪乱が一部あるがほぼフラットである。炉 石囲い炉である。構造的には4・5号住居址と同様である。炉石は北辺と西辺に残されているだけだが、掘り方から5号住居址同様方形プランが想定される。埋土中の焼土、炭化物の分布は少なく、地山の赤化、硬化は認められなかった。ピット 9本確認されている。内Pi-9は貯蔵穴であろう。埋土中より作業用の台石と思われる偏平な石が検出されている。遺物出土状況 表土除去作業中に石囲い炉が検出されたことから住居を想定して遺物を取り上げているので夾雑物はあったが全体から小破片が散漫に出土している。

#### 遺物(第14図)

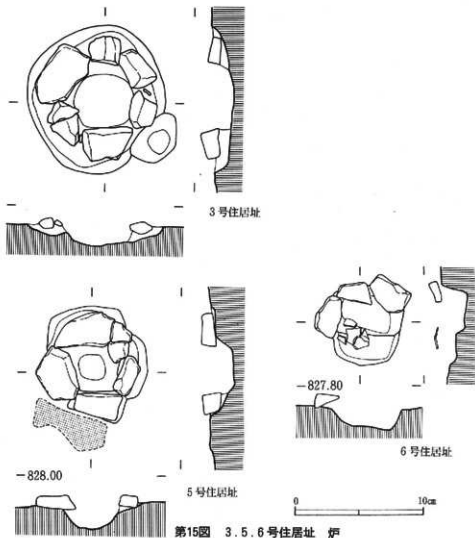
1は炉址上面から出土した深鉢底部である。底部完存、胴部1/3が残存している。2は深鉢口縁部片である。口縁端部に次線が施文され口唇部の厚みに幅があることから波状ないし把手が付けられるものと思われる。4は安山岩製の打製石斧である。側縁部に刃つぶれが見られる。5も打製石斧で粘板岩製である。風化が激しい。



第13圖 遺物

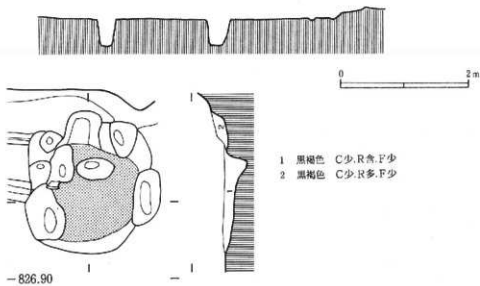
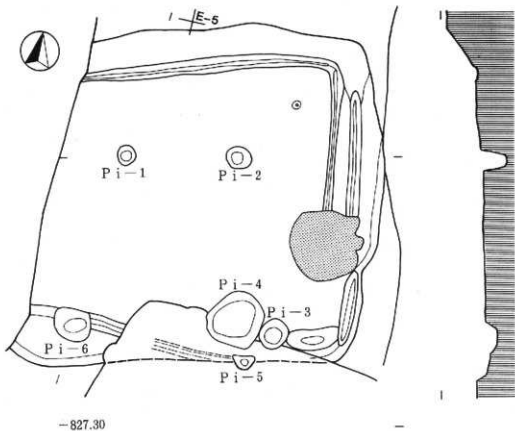


第14图 遺物



第15图 3.5.6号住居址 炉





- 1 黒褐色 C少.R多.F少  
2 黒褐色 C少.R多.F少



第16图 7号住居址

### 7号住居址 (第16図)

E・F-6区に位置する。表土除去後の精査中に確認された。南接する8号住居址に切られる。また、東側の一部を2号溝址に切られる。

形態 一部調査区域外に延びるが略方形を呈する。規模 南北5.18m、東西5.30m (現存長)を測る。床面 堅緻でフラットである。周溝 東側で一部二重となる。南側は断続的に構築されている。カマド 住居東辺やや南寄りに構築される。規模は113×104cmを測る。燃焼部底部は地山の赤化、硬化が顕著である。袖石は抜き取られていた。ピット 6本検出されている。この内Pi-4は埋土中に多量の焼土、炭化物を含んでおり柱穴とは考えられない。ここでは貯蔵穴としての機能を想定しておく。遺物出土状況 住居北東コーナー床直から坏が1個体逆位で出土している。またカマド中から甕の口縁部片が出土しているが同一個体の破片が住居覆土中からも出土している。また、Pi-4は埋土中より須恵器片、緑釉陶器片が出土している。

### 遺物 (第17図1~3)

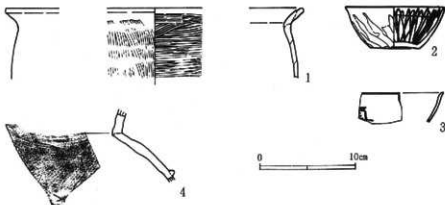
1は甕である。復原口径30cmを越す。横ナデにより口縁部を玉縁状に仕上げる。2は坏である。内面に放射状暗文を施す。見込み部に暗文は施さない。3は坏の小破片で判読はできないが墨書が見られる。

### 8号住居址 (第18図)

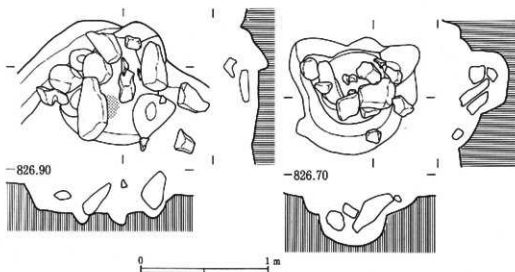
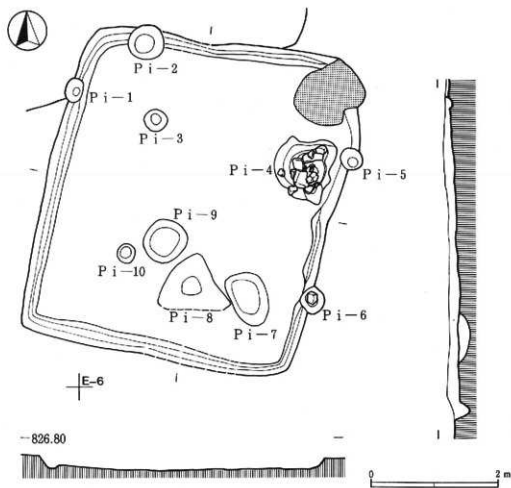
E・F-6区に位置する。7号住居址を切り、54号土壌を切って構築されている。

形態 長方形を呈する。規模 南北5.13m、東西4.46mを測る。床面 北半は堅緻である。全体にフラットである。周溝 東辺の一部で断絶する他は全周する。カマド 住居北東コーナーに設置される。97×71cmを測る。人頭大の石を中心に袖石が組まれる。燃焼部底部の地山に一部赤変が見られる。ピット 10本検出されている。Pi-4は貯蔵穴であろうか。中から拳大~人頭大の石が検出されている。またPi-9の埋土中には多量の焼土が含まれている。

遺物 (第17図-4) Pi-1から出土。須恵器甕胴部片である。貼り付け凸帯が見られる。



第17図 遺物 (1~3 7号住居址 4 8号住居址)



第18图 8号住居址

## 2 地下式墳とその遺物

ここでは地下式墳を他の土墳と分離して記述を進める。

### 1号地下式土墳（第19図）

B・C-8区に位置する。試掘調査時に竪坑が確認されている。当初天井部は残存していたが、作業の安全確保のため天井を落として調査を進めた。

**主軸** N-38°-E。 **竪坑** 92cm×87cmの円形プランを呈する。深さは198cmを測る。地下室とのレベル差はない。 **地下室の状況** レベル的には奥に行くほど高くなっている。規模は3.35m×2.52mを測る不整形長方形である。床面から天井部までの高さは最低110cmを測る。

**遺物** なし。

### 2号地下式墳（第19図）

B-8区に位置する。1号地下式墳から延びるトレンチを拡張して検出している。天井部は当初より崩壊していた。

**主軸** N-61°-W。 **竪坑** 直径120cm程の円形プランである。深さは当初1号住居とした浅い掘り込みの底部から93cmを測る。地下室との間には円形プランの掘り込みがあるがローム質土で埋められていた。 **地下室の状況** 床面はほとんどフラットである。規模は2.15m×2.10mを測るほぼ方形のプランを呈する。床面から天井までの高さは最低100cmを測る。 **遺物** なし。

### 3号地下式墳（第20図）

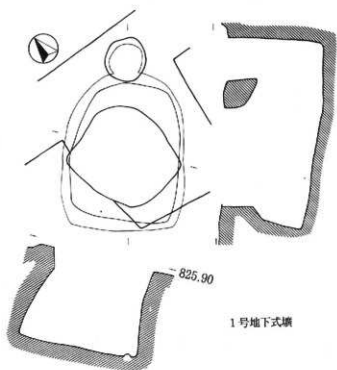
B-6区に位置する。天井が落ちた状態で検出されている。崩落のし方は土層観察の結果、天井部～表土層までの土層が地下室床面直上から層位的に確認されたことから漸次的に埋まったものではなく、一気に崩落していることが解る。

**主軸** N-20°-W。 **竪坑** 直径80cm程度の略円形プランを呈する。確認面からの深さは90cmを測る。底部は傾斜してレベル的に30cm下がった地下室床面に至る。 **地下室の状況** 長軸2.95m短軸1.40mを測り、やや不整形を呈する。床面はほぼフラットである。 **遺物** なし。

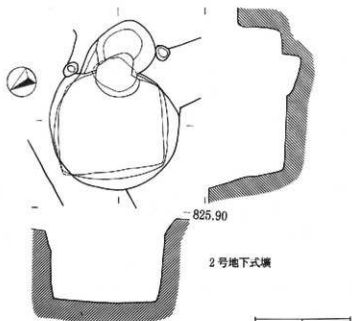
### 4号地下式墳（第20図）

B・C-6区に位置する。竪坑を共用するA・B2室からなる。閉塞石の分布が竪坑～A地下室に及ぶことから最終的にこの地下式墳が閉塞される段階でBの入り口は既に埋まっていたと判断され、B→Aという先後関係が想定される。また、A・B2室共に天井が残った状態で検出されているが、作業の安全確保のため天井を落として調査を進めた。

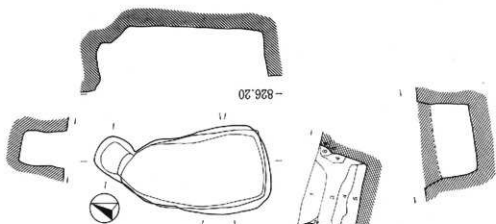
**主軸** A室はN-8°-E。B室はN-17°-Wを示す。 **竪坑** 上面プランは直径140cmほどの円形プランを呈する。断面は中位で括れロート状を呈する。深さは150cmを測る。 **地下室の状況** A室は長軸1.99m短軸1.48mを測る不整形長方形を呈する。竪坑底部からのレベル差はなくフラットに床面が構築されている。B室は長軸2.11m短軸1.61mを測る不整形長方形を呈する。竪坑底部から22cm下がって床面が構築されている。床面はフラットである。天井までの高さは1m前後となる。断面形状は長方形を呈するであろう。 **遺物**（第24図-5・6） B



1号地下式墳

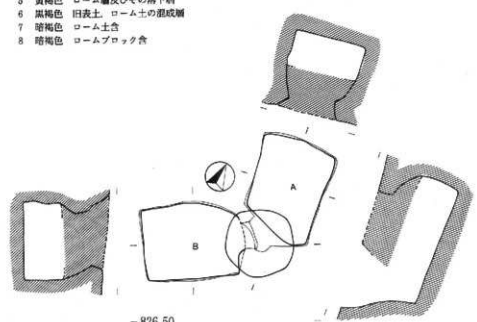


2号地下式墳



- 1 黄褐色 埋め戻し土層 (ローム質)
- 2 暗黄褐色 ローム質土, 黒色土層
- 3 黒色 旧表土層下層
- 4 暗褐色 窓移層及びその落下層
- 5 黄褐色 ローム層及びその落下層
- 6 黒褐色 旧表土, ローム土の混成層
- 7 暗褐色 ローム土含
- 8 暗褐色 ロームブロック含

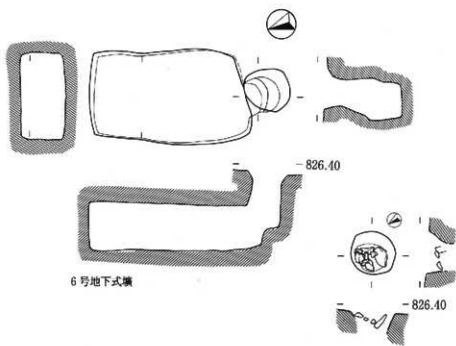
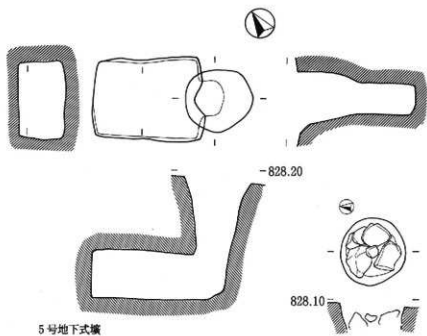
3号地下式構



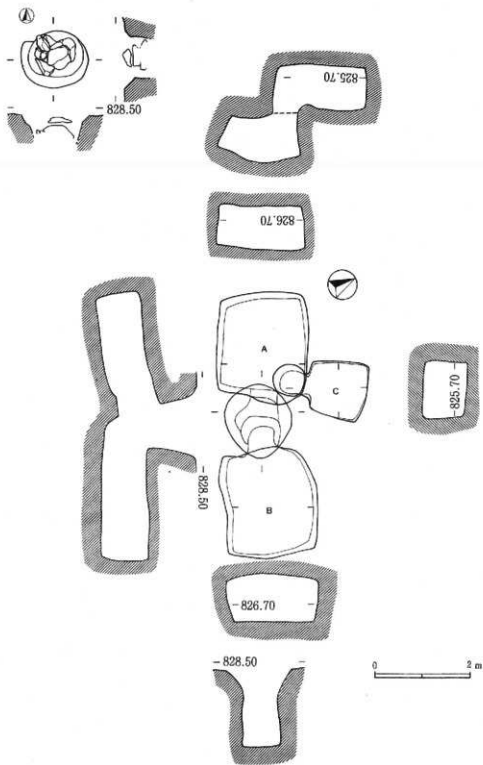
4号地下式構



第20図 3. 4号地下式構



第21图 5. 6号地下式墳



第22图 7号地下式城



地下室から土師質土器皿が2点出土している。5は口縁部1/4を欠損する。底部回転糸切り後ヘラケズリが見られる。6は完形の胴体である。底部に回転糸切り痕が観察される。共に粘土に金雲母を含んでいる。

#### 5号地下式墳（第21図）

B・C-3・4区に位置する。検出状況は非常に良好で閉塞石も組んだ状態で検出されている。しかし、大きな石なもので取り上げるのに鎖を使わなければならず表層での断面図しか作成できなかった。また、湧水が激しく、堅坑も深いことから逆に作業には困難が伴った。

**主軸** N-56°-W。 **堅坑** 直径130cm程の略円形プランを呈する。中位でロート状に括れ、閉塞石もこのレベルまで検出されている。確認面からの深さは2.50mを測る。 **地下室の状況**

長軸2.20m短軸1.74mを測る長方形プランを呈する。堅坑底部とのレベル差は12cmを測る。床面は奥壁側が若干高くなっている。天井までの高さは1.03mを測る。断面形状は長方形を呈する。 **遺物**（第24図-1） 内耳土器の口縁部が出土している。受口状を呈する。

#### 6号地下式墳（第21図）

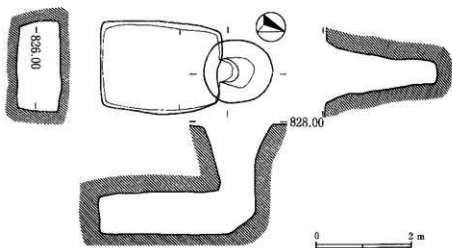
C-6区に位置する。検出状況は良好で閉塞石も組んだ状態で検出されている。

**主軸** N-20°-E、 **堅坑** 直径90cm程度の不整形のプランを呈し、深さは確認面から1.13mを測る。堅坑の上位に括れがあり、ロート状を呈する。閉塞石は地下室の途中で流れ込んでいた。 **地下室の状況** 長軸3.28m短軸2.02mを測る長方形プランを呈する。堅坑底部から41cm下がって床面が構築されている。床面はほとんどフラットで、天井までの高さは98cmを測る。断面形状は長方形を呈する。 **遺物**（第24図-2・3） 内耳土器口縁部片が2点出土している。2は体部上位で軽く屈曲して直立した口縁部に至る。3は体部上位で屈曲して内湾ぎみの口縁に至る。

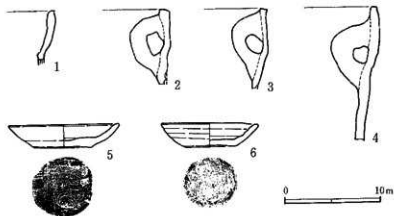
#### 7号地下式墳（第22図）

D-3区に位置する。堅坑を共用するA・B2室とA室床面を掘り込んだC室とからなる。検出状況は良好で閉塞石も組んだ状態で検出されている。

**主軸** A室はN-65°-W。B室はN-106°-E、C室はN-35°-Eを示す。 **堅坑** A・B室の堅坑は直径140cmを越す不整形プランを呈し、中位で括れ、ロート状の断面形状を呈する。この括れの部位がA・B両室ともに天井の位置になる。深さは1.62mを測る。C室の堅坑は直形60cmほどの円形プランを呈し、深さは1.01mを測る。 **地下室の状況** A室は長軸2.33m短軸1.92mを測る略長方形を呈する。堅坑底部とのレベル差は12cmを測る。床面は奥壁側に向かって下がっており、そのレベル差は34cmにも達する。天井までの高さは91cmを測る。断面形状は長方形を呈する。B室は長軸2.30m短軸1.95mを測る不整形長方形プランを呈し、堅坑底部とのレベル差は33cmを測る。C室は長軸1.31m短軸1.23mを測る略方形を呈する。堅坑底部とのレベル差は無い。床面はほぼフラットに構成され、天井までの高さは92cmを測る。断面形状は長方形を呈する。 **遺物** 無し。



第23図 地下式墳



第24図 遺物

8号地下式墳（第23図）

F-4区に位置する。検出状況は良好で天井が残った状態で検出されている。

**主軸** N-161°-W、**堅坑** 長軸143cm短軸132cmを測る楕円形プランを呈する。深さは1.88mを測る。中位で括れロート状の断面形状を呈する。**地下室の状況** 長軸2.53m短軸1.96mの長方形プランを呈し、堅坑底部とのレベル差は43cmを測る。床面はフラットに構築され、天井までの高さは88cmを測る。断面形状は略長方形を呈する。**遺物**（第24図-4）内耳上器の口縁部片を提示した。この他に内耳土器底部片も出土したが、これは堅坑から5m離れた試掘坑の出土遺物と接合している。また、図示していないが石臼が1点出土している。閉塞石に使用したものであろうか。

### 3 土壌とその遺物

調査時の土壌管理が十分でなく、整理の段階で新たに認定したもの、欠番としたものがある。ここでは整理の段階で振り直した番号により記述を進める。なお、いわゆるピットと呼んでいる規模の小さいものには土壌番号は原則的に振っていない。遺構分布図に位置のみを提示してある。また、紙面の都合で一部記述を割愛する。

**1号土壌** B-8区に位置する。完掘していないが直径1.3mほどの円形プランが想定される。確認面からの深さは35cmを測る。

**2号土壌** B-8区に位置する。完掘していない。現存長東西1.31mを測る。確認面からの深さは52cmを測る。

**3号土壌** B-8区に位置する。これは住居址の記述で既に触れたが当初1号住居址として想定したものの施設と考えられたが前記のとおり単独のものとして扱う。長軸83cm短軸59cmを測る。確認面からの深さは49cmを測る。

**4号土壌** B-8区に位置する。3号土壌と同様である。南北1.67m東西1.76mを測る隅丸方形プランを呈する。確認面からの深さは72cmを測る。確認面の上部から広い範囲に焼土が広がっていた。覆土中にも焼土単一層が厚く堆積していた部分があったが土壌底部や壁体に赤変や硬化は見られず埋没過程で投入されたものと判断した。土壌底部には人頭大の平石で方形に配石されている。機能は不明。またこの土壌の周辺から35図-8の天目茶碗の破片が出土している他オロ茶碗の小片も出土している。

**8号土壌** A-3区に位置する。調査区外に延びることから形態、規模は不明。黒色土中に構築されている。遺物は35図-1・2で提示してある。1は完形の土師器坏で、内面に放射状暗文が施されている。体部ナデ整形後下半をヘラケズリ。口縁部内外面の一部に煤が付着していることから灯明皿としての使用が考えられる。

**16号土壌** B-5区に位置する。長軸113cm、短軸107cmを測る楕円形プランの土壌である。深さは23cmを測る。17号土壌を切っている。

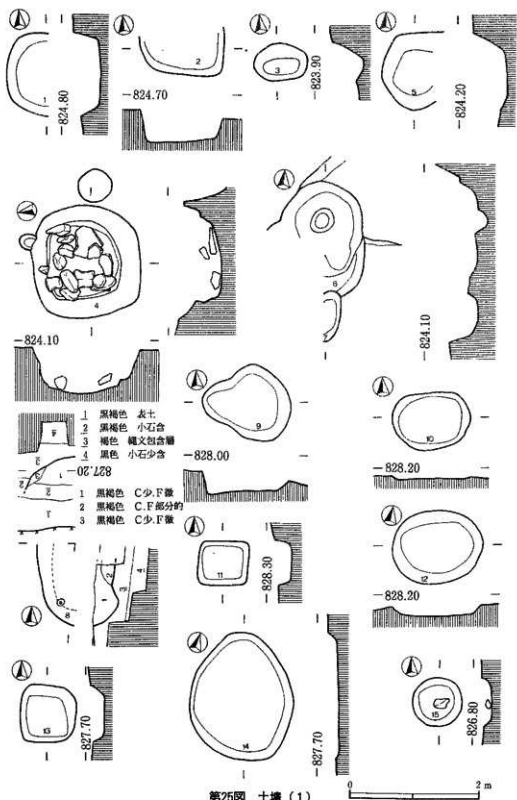
**27号土壌** B-7区に位置する。東西1.45m南北1.73mを測る不整形プランの土壌である。北側で一部オーバーハングしている。

**30号土壌** D-4区に位置する。試掘調査時に確認されている。長軸1.58m短軸1.05mを測る。不整形円形プランの土壌である。覆土中～上部に拳大～人頭大の石が投入されている。深さは51cmを測る。摺り鉢の体部破片が出土している。

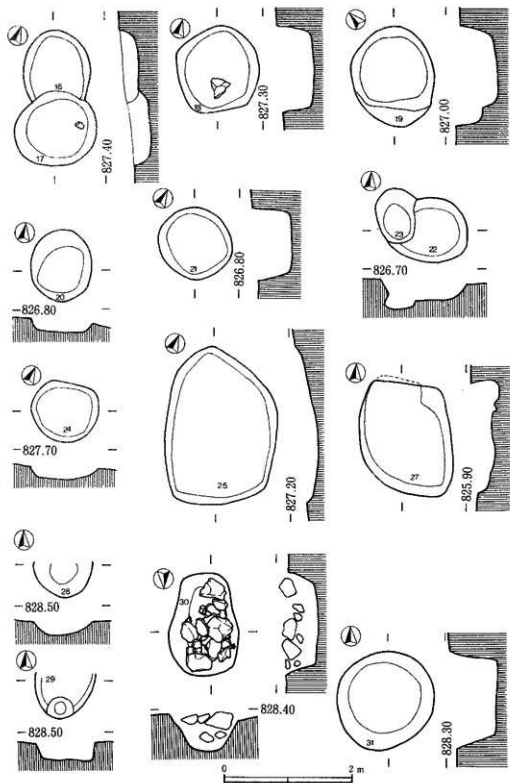
**31号土壌** D-4区に位置する。直径1.5mを越える円形プランの土壌である。深さは74cmを測る。

**31号土壌** D-4区に位置する。直径1.4m前後の円形プランの土壌である。底部は中心よりも南側に偏在している。深さは48cmを測る。

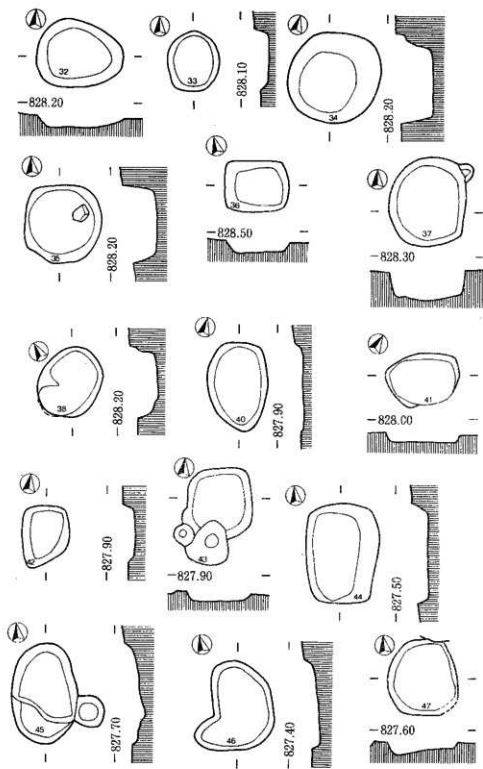
**35号土壌** D-4区に位置する。5号住居址を切って構築されている。直径1.2m前後の略円



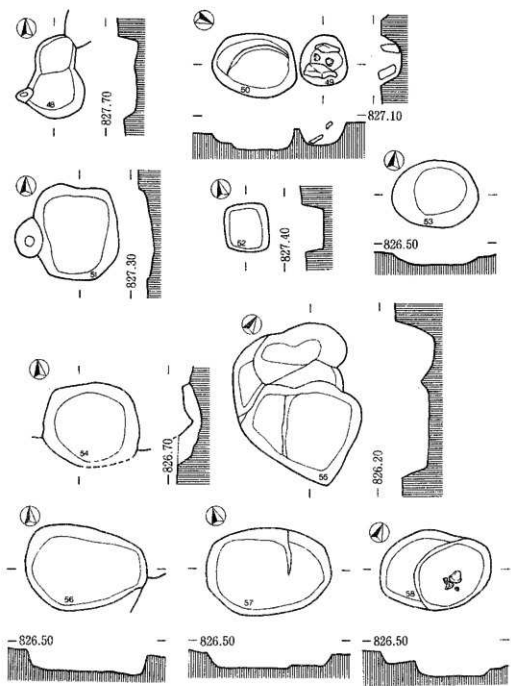
第25圖 土坑 (1)



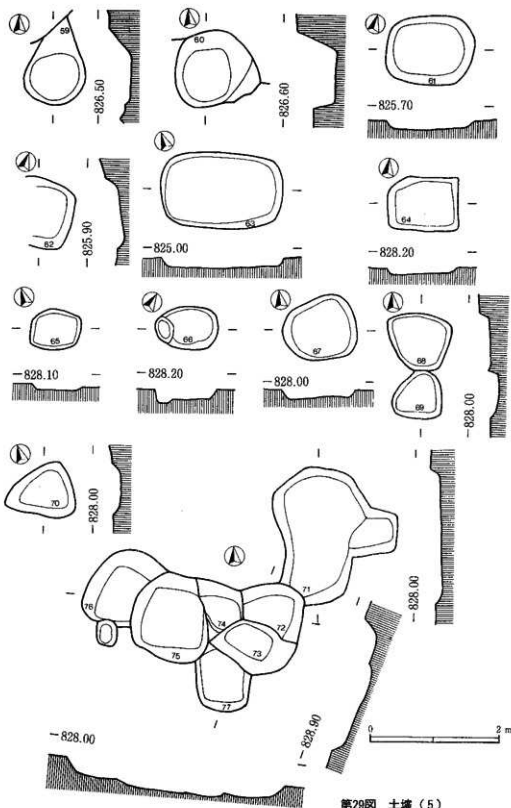
第26图 土坑(2)



第27図 土坑 (3)

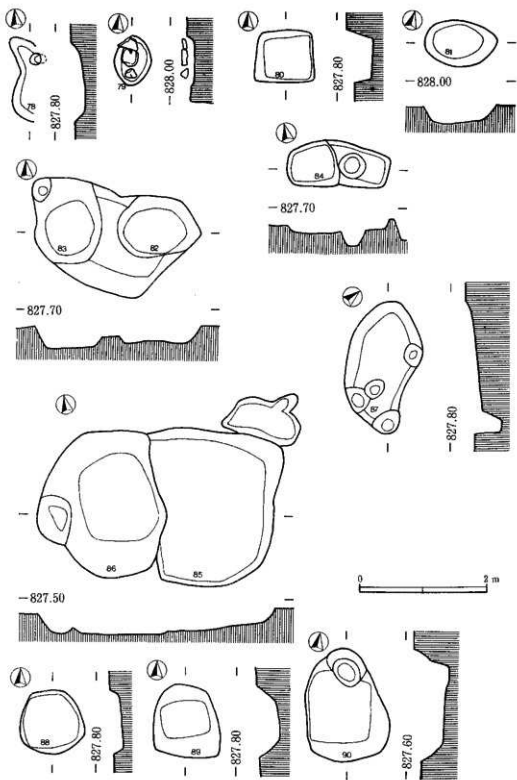


第28圖 土壇 (4)

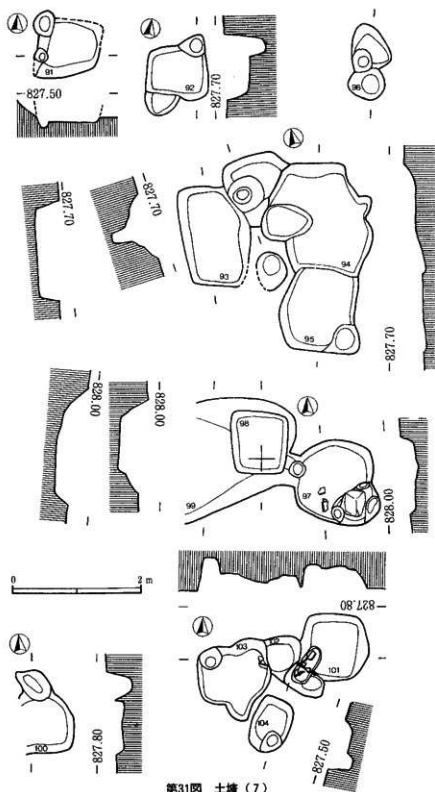


第29図 土坑(5)

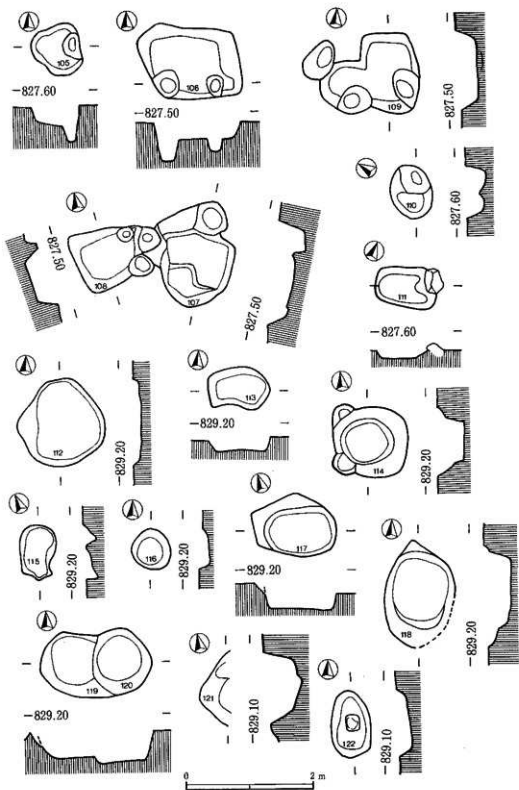




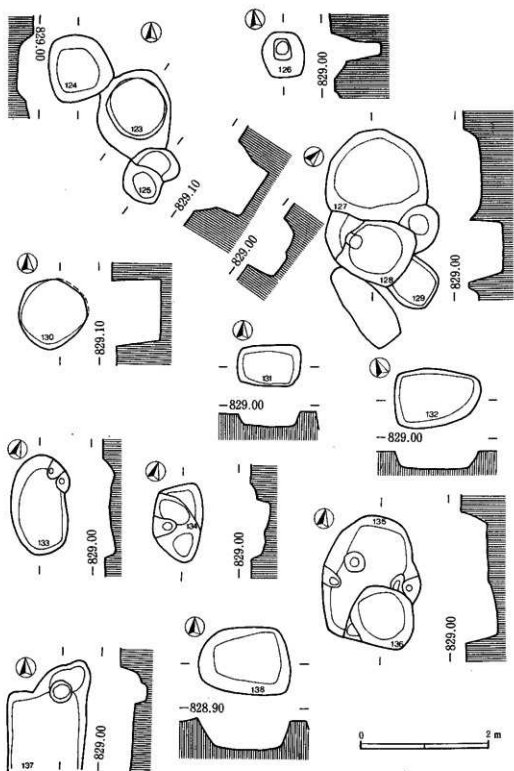
第30圖 土坑(6)



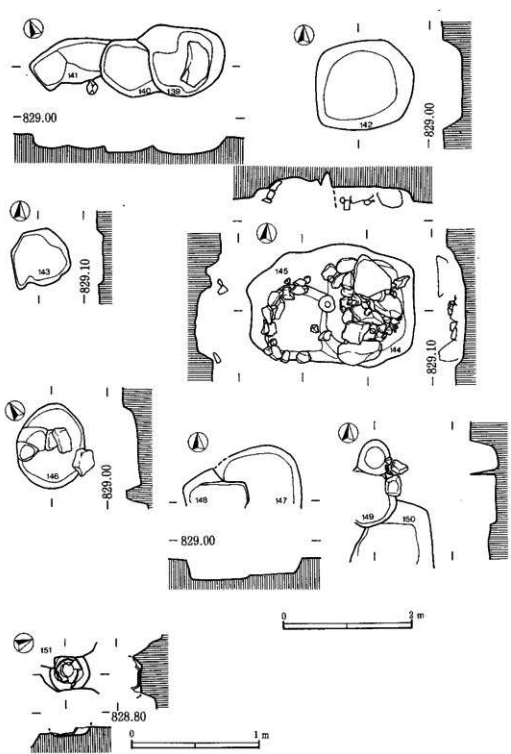
第31圖 土城(7)



第32圖 土坑(8)



第33圖 土坑(9)



第34图 土城 (10)

形プランを呈する。深さは50cmを測る。覆土上層から小児頭大の石が検出されている。

45号土壌 D-5区に位置する。長軸157m短軸106mを測る楕円形プランの土壌である。底部は不整で凹凸が目立つ。深さは23cmを測る。覆土中から骨粉が検出されていることから土壌墓と思われる。時期不明。

46号土壌 D-5区に位置する。長軸139mを測る不整形の土壌である。深さは15cmを測る。覆土中より骨粉が検出されていることから土壌墓と思われる。時期不明。

49号土壌 D-6区に位置する。直径70cmを越す不整形プランを呈する。深さは30cmを測る。底部に平石が2個設置されていた。覆土中に若干焼土、炭化物粒子が分布していた。

50号土壌 D-6区に位置する。覆土中より骨片が多量に出土した他、古銭6点出土している(判読不明)。土壌墓であろう。

51号土壌 D-6区に位置する。長軸1.43m短軸1.33mを測る略方形プランを呈する。深さは15cmを測る。覆土中より脆弱な骨片及び骨粉が多量に出土。古銭1点が出土している。土壌墓であろう。古銭は腐食しており図化は不可能だった。

52号土壌 D・E-6区に位置する。南北77cm、東西69cmを測る方形プランの土壌である。深さは32cmを測る。同様の規模、形態のものとして11、13、36、39、80、98の各土壌が挙げられる。

54号土壌 E-6区に位置する。8号住居址に切られる。長軸1.50m短軸1.32mの楕円形プランを呈する。深さは30cmを測る。遺物なし。

60号土壌 F-7区に位置する。2号溝状遺構と重複するが先後関係不明。直径1.2m前後の略円形プランを呈する。深さは確認面より60cmを測る。

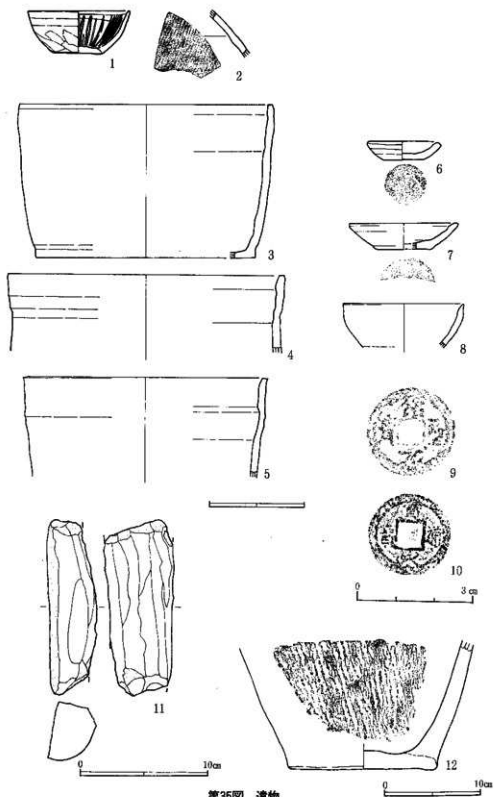
63号土壌 F-8区に位置する。長軸1.89m短軸1.19mを測る。プランは隅丸長方形を呈する。深さは16cmを測る。遺物なし。

71～77号土壌 F-5区に位置する。重複する土壌群と解釈した。何れも浅い掘り込みである。規模は最大の71号土壌で長軸2.16m短軸1.50mを測る。深さは15cmを測る。75号土壌は長軸1.35m短軸1.13mを測る略方形プランを呈する。

79号土壌 D-5区に位置する。長軸78cm短軸58cmを測る楕円形プランを呈する。深さは15cmを測る。上面に小児頭大の平石が3個並んで検出されている。この石の上から土師質土器皿底部片が出土している。

82、83号土壌 F-5区に位置する。浅い落ち込みで両者は連係しているが、この浅い落ち込みが遺構覆土なのか自然堆積の不整層なのか不明。82号土壌は長軸1.22m短軸0.93mを測る楕円形プランの土壌である。確認面からの深さは26cmを測る。83号土壌は長軸1.34m短軸1.03mを測る略長方形プランの土壌で、深さは36cmを測る。北西コーナーに小ビットが穿たれている。

84号土壌 F-5区に位置する。長軸158cm短軸73cmを測る長方形プランの上層である。この土壌は中央で段差があり西半が若干深くなっている。この西側で深さ17cmを測る。また、中央東寄りに小ビットが穿たれている。



第35圖 遺物

87号土塊 G-5区に位置する。長軸2.07m短軸1.03mを測る。不整形プランを呈し、極く浅い掘り込みである。プラン内に小ピットが4穴穿たれている。

90号土塊 G-5区に位置する。長軸1.75m短軸1.18mを測る。略長方形プランを呈し、北辺のプラン内に小ピットが穿たれている。深さは42cmを測る。

91号土塊 G-5区に位置する。長軸96cm短軸86cmを測る略長方形プランの土塊である。西辺の各コーナーに小ピットが穿たれている。

92号土塊 G-5区に位置する。長軸96cm短軸79cmを測る長方形プランを呈し、深さは33cmを測る。北東コーナーと南西コーナーに小ピットが穿たれている。

93~95号土塊 G-5区に位置する。互いに重複するが先後関係は不明。93号土塊は長軸1.55m短軸1.06mの長方形プランの主体部と直径1.1m前後の略円形プランの張り出し部とからなる。変則的な認定ではあるが、この遺跡では長方形プランの一部に小ピットが穿たれることが多いことからこの様に認定した。この土塊からは内耳土器の口縁部片が出土している(35図-4)。出土状況は細片に割れ、主体部と張り出しの双方から出土し接合している。94号土塊も張り出しを持つ土塊であるが、長軸1.68m短軸1.33mを測る。不整形プランである。95号土塊は残存部で長軸1.29m短軸1.16mを測る。プランは不整形を呈する。南東コーナーに小ピットが穿たれている。

97号土塊 G-4・5区に位置する。99号土塊と重複するが先後関係は不明。直径1.2m前後の不整形円形プランを呈し、一隅に小ピットが穿たれている。覆土上層から内耳土器の破片が出土している。(35図-5) また、不整形で荒く面取りされた砥石(35図-11)も出土している。

99号土塊 G・H-4・5区に位置する。完掘できていないのでプラン、規模共に不明。位置的なことから後述する2号溝状遺構の延長の可能性が考慮される。また、覆土中から内耳土器の破片が出土している。(35図-3)

100号土塊 F-5区に位置する。完掘できていないのでプラン、規模共に不明。現存長が南北1.30m東西80cmを測る。北辺に小ピットが穿たれている。

101~103号土塊 F・G-5区に位置する。共に重複するが先後関係は不明。101号土塊は南北が1.04m東西が1.06mを測る。プランは略方形である。南西コーナーに小ピットが2穴穿たれている。覆土の上層から内耳土器の破片、土師質土器小皿(35図-6)、石臼破片、炭化木材が出土している。この小皿は器壁が厚く、底部には回転糸切り痕が残る。胎土中には金雲母が含まれる。103号土塊は東西1.15m南北1.18mを測る不整形プランの土塊である。覆土上層から石臼の破片が出土している。

106号土塊 G-5区に位置する。長軸1.52m短軸1.11mを測る不整形長方形プランの土塊である。深さは28cmを測る。南辺に接して2穴小ピットが穿たれている。

114号土塊 F-2区に位置する。直径1.1m前後の略円形プランの土塊で、深さは42cmを測る。南西部と北西部に小ピットが穿たれている。



116号土壌 F-2区に位置する。3号小竪穴を切って構築されている。この土壌の掘り方は、直径60cmを越す略円形プランであるが、この掘り方に石灰を少量混ぜた粘土を厚さ10cm前後に塗ったもので、肥溜めとしての機能を想定したい。その時期については3号小竪穴を切って構築されていることから近世～現代のものと考えられる。同様の構造の土壌として119、120、135、136の各土壌が挙げられる。

117号土壌 F-2区に位置する。3号小竪穴に切られ、118号土壌との先後関係は不明である。若干掘りすぎているが現存長で長軸113cm短軸77cmを測る。プランは楕円形を呈する。覆土中から磨石が出土しているが、土壌の時期を規定するものか疑問である。

118号土壌 F-2区に位置する。3号小竪穴に切られる。長軸1.50（現存長）短軸1.10mを測る。深さは41cmを測る。

119、120号土壌 3号小竪穴及び120号土壌を切って119号土壌が構築されている。構造については先述のとおりである。

123号土壌 E-3区に位置する。124、125号土壌と重複しているが先後関係は不明である。上面は不整形プランであるが中位の括れ部では直径90cm前後の略円形プランとなっている。深さは65cmを測る。底面は平滑に作られている。

128号土壌 E-3区に位置する。127、129号土壌と重複関係があるが先後関係は不明である。底面は平滑に仕上げられている。覆土中から古銭「紹聖元豊」が1点出土している。

144、145号土壌 F・G-3区に位置する。石の残存具合より145号が144号の後から構築されたと判断される。144号土壌は長軸1.87m短軸1.37m（現存長）を測る略長方形プランの土壌で、土壌中には拳大～50cmを越える石が多量に投入されていた。145号土壌は一辺が1m前後の略長方形プランの土壌である。東半はほとんど残存しないが西半を見ると小兒頭大の平石を壁に丁寧に並べてあることが解る。前記したとおり145号土壌の構築が後ではあるが掘り方が共通することや土層観察でも明確な差はないことから両者は共に機能していた可能性も考慮される。

147、148号土壌 F・G-3区に位置する。重複はしているが先後関係は不明。南半を田普請時に破壊されている。148号土壌の現存長は東西1.01mを測る。土壌底面は147号土壌より下位に構築されている。

149、150号土壌 G-3区に位置する。150号土壌の南半は田普請時に破壊されている。現存長東西1.26mを測る。149号土壌は西側調査区外に伸びる。北側に小ビットが穿たれている。現存長1.34mを測る。

151号土壌 E-3区に位置する。水田の石垣と攪乱の間から検出された土器埋設土壌である。攪乱が顕著である。水田の石垣中から同一個体の破片が出土、接合している。（35図-12）

なお第35図-7はG-5区のビット中からの、10は3号小竪穴からの出土である。

#### 4 その他の遺構と遺物

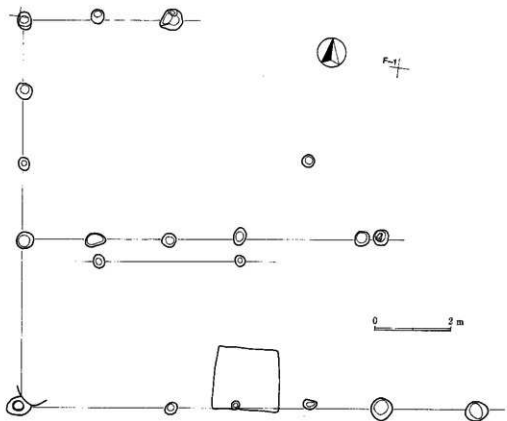
##### a 堀立柱建物址と柵列

###### 堀立柱建物址（第36図）

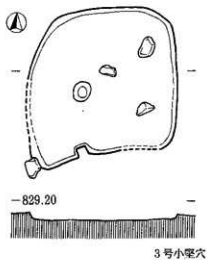
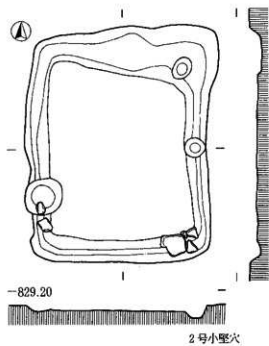
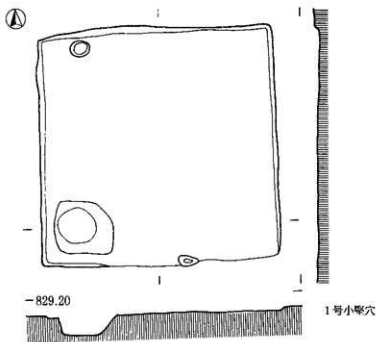
E・F-1・2・3区に広がる。この遺構は良好な遺物もなく、判断を躊躇する点が無いが無いが一応伝承のとおり位置で検出されたことや表土除去中の遺物に多量に近世、近代のものが含まれていたことなどから前記の忠興寺の建物跡と判断しておく。この建物址の柱穴は古代～中世の大規模な堀立柱建物址のように大型の柱穴ではなく、小規模で浅いものが多い点特徴的である。また、上墳との関連も注意しなくてはならない。特に西南コーナーに当たる位置にある粘土の貼り付けられた土壌等の関係も注意しなくてはならない。

###### 柵列（付図参照）

E・F-3区に位置する。図は遺構分布図に示したのみである。ここでは4個以上のピットが並ぶものを柵列とした。2列確認されている。この2列とも上記の堀立柱建物址の長軸方向と全く同じ主軸となっている。機能は具体的には解らないが、この堀立柱建物址と関連した施設としてはほぼ誤りは無いであろう。



第36図 堀立柱建物址



第37图 小壁穴



#### b 小竪穴 (第37図)

ここでは燃焼施設を持たず居住空間とは断定できない浅い掘り込みを持った小規模な竪穴を小竪穴とした。3基検出されている。

1号小竪穴 F-2区に位置する。一辺が3.7mほどの方形プランを呈する。埋土は黒色土の若干混じったローム質土であった。南西コーナーに長軸92cm、短軸81cmを測る不整楕円形プランの土壌が伴う。深さは32cmを測る。この遺構に帰属するものである。この他に小ピットが2穴検出されている。遺物は図示していないが近世の陶磁器片が検出されている。

2号小竪穴 F-2区に位置する。長軸が3.66m短軸2.82mを測り、略長方形プランを呈する。埋土は1号小竪穴と同様。壁際に周溝が全周する。これは北壁際で広くなり、北東コーナーで最大幅となる。周溝中には3穴の小ピットが穿たれている。また南東コーナーには礫が集積されている。遺物は図示していないが近世の陶磁器片が検出されている。

3号小竪穴 F-2区に位置する。117号土壌を切り116号土壌及び119号土壌により切られる。覆土中には多量の焼土、炭化物が含まれている。また、床面直上には広い範囲から糞のものとされる灰が検出されている。遺物としては近世の陶磁器片の他、「寛永通宝」(35図-10)、硯の断欠が検出されている。

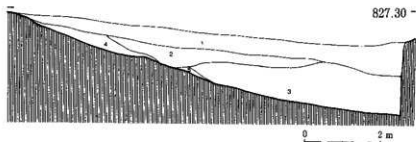
#### c 溝状遺構 (付図参照)

1号溝状遺構 B-6区に位置する。掘り込みは浅い。遺物は出土していない。

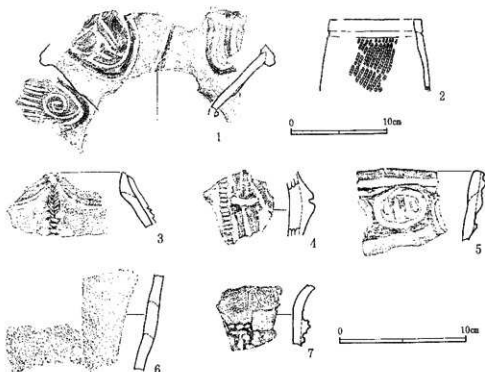
2号溝状遺構 G-4・5区を起点にE-4区まで東進し屈曲してE-7区まで南下、また屈曲してF-7区の調査区域外に延びるコの字状に展開する。F・G-6・7区が盛土範囲ということで今回は調査していないので断定はできないが、中世の遺物の分布、中世に属すると思われる遺構分布を見ると、これらを強く規制するものであることが窺われる。掘り込みは深くはなく、遺存状態が良好な部分でも30~40cmを測るに止まる。覆土中から青磁皿の小破片が出土している。

3~5号溝状遺構 旧地境部、道路部から検出されている。これらに関連したものであろうか。

6号溝状遺構 F・G-5区に位置する。南半は調査されていないので断定できないが、自然地形の変曲部である可能性が高い。



第38図 土層図



第39図 遺物

d 包含層、遺構外出土の遺物

第18図に東側斜面の遺構確認面以下の上層図を提示した。1層は褐色土層、2層は黒褐色土層、3層は黒色土層である。以上は縄文時代の遺物包含層である。4層は褐色土層、5層は暗褐色土層で、これらの層位は無遺物層である。これからこの遺跡の縄文集落は尾根の先端に位置していたことが理解できる。また、平安時代には堆積作用が進み、この低位部を居住空間としても利用しているのが解る。

包含層及び遺構外出土の遺物を第39図に提示した。5は縄文時代中期後葉、6は同前期前半、7は同後期前葉の土器片である。6の胎土中には繊維が含まれている。

### 3 小 結

この宮地第2遺跡の調査の成果は重要なものがあつた。縄文時代の小集落の立地と内容、平安時代の集落、中世の遺構群の分布、近世の寺の確認等である。資料提示が不十分であつたことを反省すると共に機会を見てその位置付けをしていきたい。

## 第3章 宮地第3遺跡

# 1 遺跡の概要と調査の経過

宮地第2遺跡は標高810～818mを測る北→南に延びる幅約150mの尾根上に立地している。調査は尾根上のほとんどの部分が対象となっている。

調査は平成2年7月10日から表土除去を開始し、7月16日より作業員を動員して遺構確認に着手している。調査は広範囲に及ぶことから時間がかかったが9月6日に終了し、9月20日付け長坂警察署長宛に埋蔵物発見届を提出。同日付けで県教育長宛に保管証を提出している。

なお調査用の基準点は斜面上の任意の1点に設定し、セオドライトによって磁北を測り出し10mピッチでグリッドを設定していった。内4点について基準点測量をしてある。(第41図)

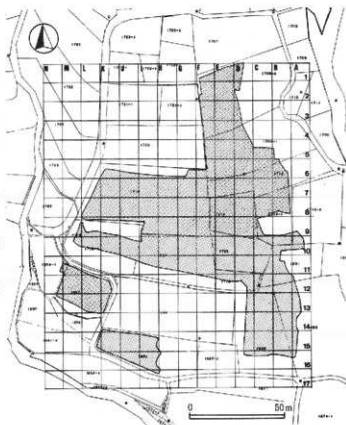
# 2 調査の結果

## 1 層序

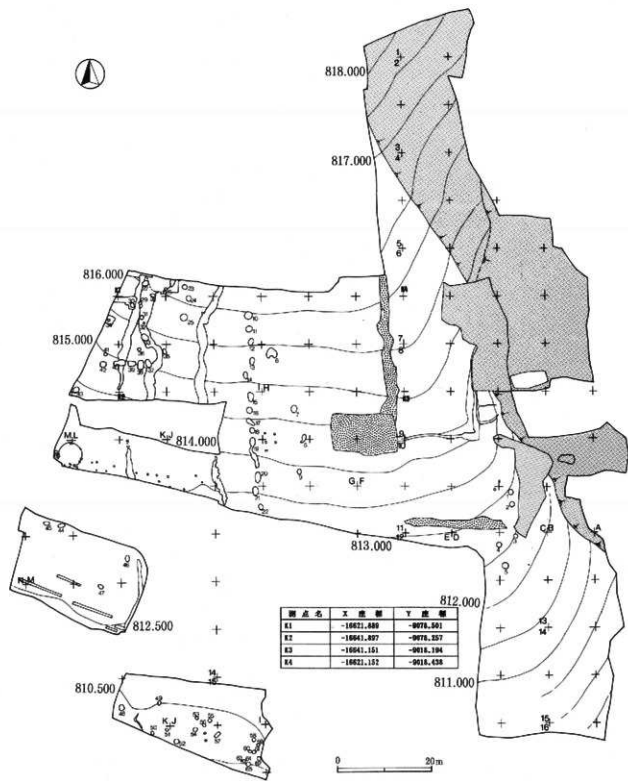
尾根上はほとんどの地点で表土層直下がソフトローム層になっているが、尾根の西～南辺部に当たる部分では漸移層の堆積が認められた。沖積層の層序については後述する。

## 2 発見された遺構と遺物

宮地第3遺跡から発見された遺構は縄文時代中期住居地2軒(中期初頭1軒、中期後葉1軒)土壌66基(内遺物、覆土から縄文時代の所産と思われるもの30基)、時期不明溝址6条及びピット数穴である。遺物は縄文土器(前期～晩期)、石器(石鏃、石匙、打製石斧、凹石、磨石、砥石、石核等)、平安時代土師器、須恵器等である。その総量は整理箱3箱程度である。



第40図 グリッド配置図



第41图 全测图



## 1 住居址とその遺物

### 1号住居址 (第42図)

L・M-10区に位置する。試掘調査時に一部を調査しているが住居址とは認定できなかった。今回の調査で面的に広げて住居址として認定した。

**形態** 住居址南側の一部で壁が確認できなかったが円形もしくは楕円形プランと思われる。

**規模** 現存長最大東西5.25mを測る。床面 軟弱である。中央部に行くほど低く構築される。

**炉** 中央部に2ヶ所地山の赤変、硬化部分があり地床炉と思われる。また、これらの地床炉の縁辺を切り込んでいるピットがあるが炉に伴う施設と考えられる。ピット 10本検出されている。内Pi-8~10は炉に伴う施設と考えられる他具体的な機能は不明。遺物出土状況 覆上中から若干の破片が出土している。またPi-10からは第43図-1の土器が出土している。これは残存部位とその出土位置から当初は残存部位完形のもの埋没されていた可能性が高い。また、同図-5はPi-2からの出土

### 遺物 (第43図1-5)

1は頸部で強く括れる深鉢。施文順位は縦区割→横位沈線→粘土紐貼り付け→半載竹管刺突という順位である。同部上半1/2残存。2は無文口縁部片である。波状となる。3は浅鉢口縁部片。口縁端部から2段に半載竹管の刺突が見られる。5はチャート製の石匙で最大長4.2cm、最大幅5.0cm、最大厚1.5cmを測る。

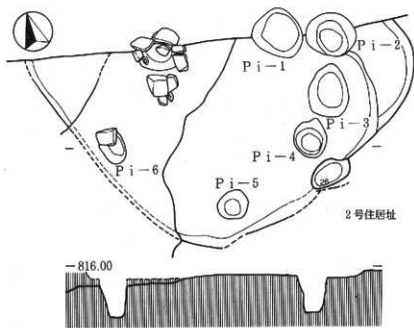
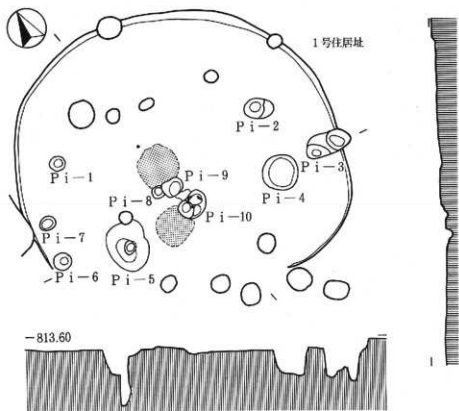
### 2号住居址 (第42図)

J・K-6区に位置する。中央を4号溝址により床面まで破壊されている他26号上壁に切られる。北半は調査区域外に延びる。4号溝址を調査中、溝底より石甕炉状の石組を検出。周囲を精査しプランを確認。2号住居址として認定した。

**形態** 不明。規模 現存長東西6.11m、南北3.25mを測る。床面 軟弱である。東辺で段差がつき建て替え、もしくは2軒であった可能性が考慮される。ここでは明確な根拠が無いため1軒の住居址と判断した。炉 住居址中央やや西寄りに構築されている。北半は調査区域外だったが部分的に拡張して全掘している。燃焼部を掘った後周囲に拳大~人頭大の平石で石甕いがを構築している。ピット 6本検出されている。東半から集中して検出されており、その機能については判断できない。遺物出土状況 4号溝址出土遺物の中に同時期のものが含まれていたが接合関係は見られなかった。提示した資料は覆土中の出土品である。また、住居東半覆土中には人頭大以上の石が散在していた。

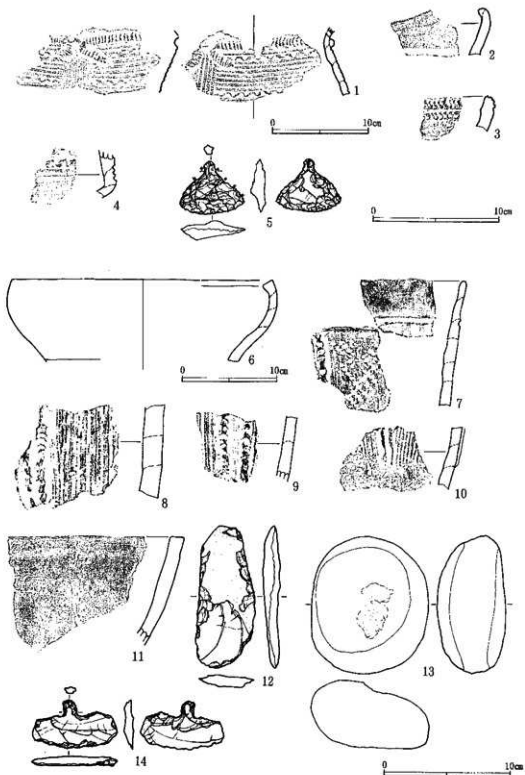
### 遺物 (第43図1-5)

6は内湾する深鉢口縁部片である。1/2残存。内外面共ヘラケンマされている。7は沈線及び隆帯で区割した中に単節RLが充填されている。12は打製石斧で最大長11.1cm、最大幅4.7cmを測る。13は安山岩製の磨石である。中央に凹みがある。14は粘版岩製の石匙である。最大長3.8cm、最大幅6.5cm、最大厚0.8cmを測る。



第42图 1. 2号住居址





第43图 遺物 (1~5 1号住居址 6~14 2号住居址)

## 2 土墳とその遺物

調査時の混乱の為、ここでは新たに土墳番号を振り直し、その順で記述を進める。なお、いわゆるピットと呼ばれるような規模の小さいものについても一部土墳として記載している。他のものは全測図中に位置を提示するに止めた。なお紙面の都合上一部記述を割愛する。

1号土墳 C-11区に位置する。長軸1.36m短軸0.76mを測る楕円形プランを呈する。深さは18cmを測る。壁は緩やかに立上がる。遺物なし。

2号土墳 C-11区に位置する。直径1.2m以上の略円形プランを呈する。深さは22cmを測る。壁は緩やかに立上がる。

3号土墳 C-12区に位置する。直径1m前後を測る略円形プランの土墳である。深さは32cmを測る。壁は急に立上がる。

4号土墳 C-12区に位置する。長軸97cm短軸86cmを測る隅丸長方形プランを呈する。深さは42cmを測る。壁は急に立上がる。

5号土墳 C-12区に位置する。直径1.4m程の円形プランを呈する。この土墳は土墳内面に石灰を混ぜた粘土を張りつけた構造をもち、その内面には桶の尻痕が明瞭に観察される。周囲の状況から畑耕作に使用するための肥溜めと判断する。深さは80cmを測り、底部にも粘土が貼られている。廃絶にあたり石で埋戻されている。また、桶の材は全く検出されていない。

6号土墳 H-8区に位置する。不整形プランを呈する。底部にピットが穿たれている。深さは最深67cmを測る。

7号土墳 H-9区に位置する。長軸1.58m短軸1.16mを測る楕円形プランを呈する。深さは31cmを測る。

8号土墳 H-9・10区に位置する。不整形プラン。深さは21cmを測る。

9号土墳 H-10区に位置する。長軸1.26m短軸0.86mを測る楕円形プランを呈する。深さは37cmを測る。

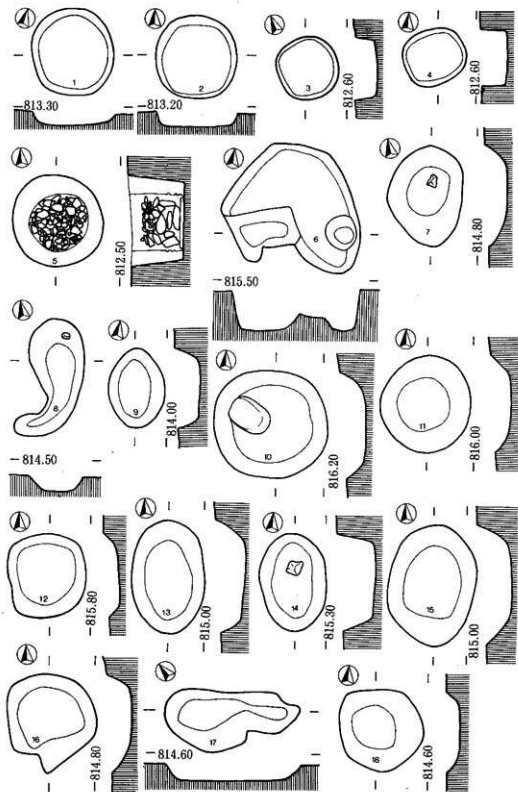
10～22号土墳 I-7～11区に位置する。形態、規模についてはバラエティーがあるが空間的な占地及び覆土の均質性から一連のものとして判断する。機能については不明。覆土は一部のものに砂が単一層として分布するものがあり、土墳開口中に斜面上位から流れ込んだものと思われる。遺物としては縄文土器片が稀に層中分布するが土墳の時期を決定しうるものは無い。

23号土墳 J-6区に位置する。直径1.1mほどの略円形プランを呈する。深さは77cmを測る。覆土上層に焼土が投入されていた。

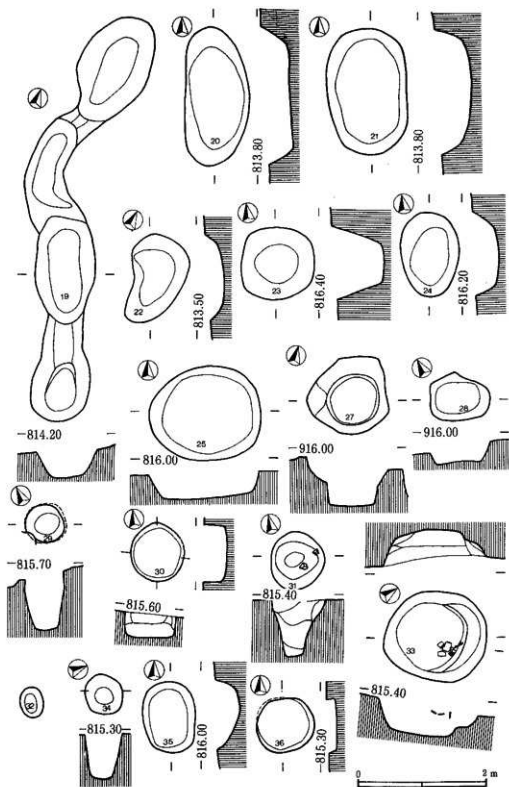
24号土墳 J-7区に位置する。長軸1.33m短軸87cmを測る楕円形プランを呈する。深さは37cmを測る。

25号土墳 J-7区に位置する。長軸1.73m短軸1.48mを測る楕円形プランを呈する。深さは38cmを測る。

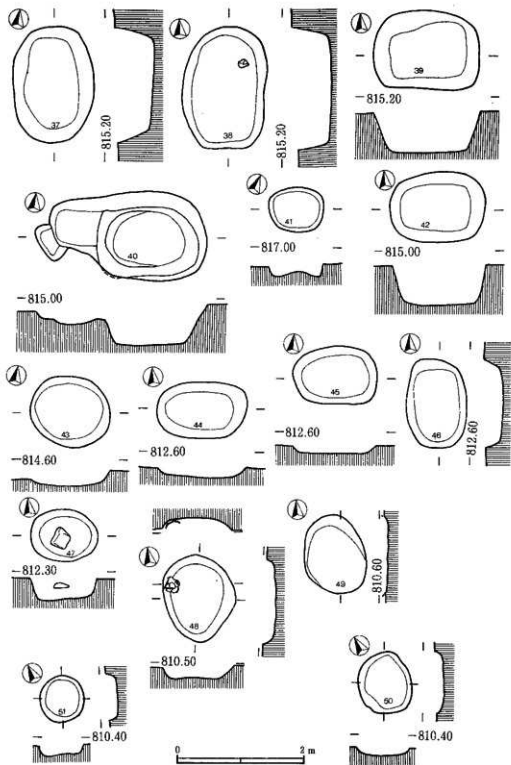
26号土墳 K-6区に位置する。2号住居址を切り込んで構築されている。2号住居址と遺物



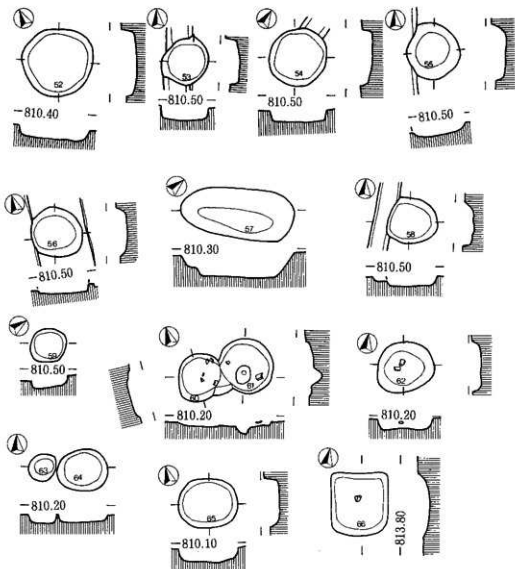
第44図 土坑 (1)



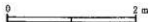
第45図 土坑(2)



第46图 土坑 (3)



第47図 土坑(4)



の接合関係があるが2号住居址覆土に帰属させた。

27号土坑 K-6区に位置する。4号溝址調査中に溝底から検出された。上面は不整形となるが、中位で括れ、円形のプランを呈する。確認面からの深さは78cmを測る。

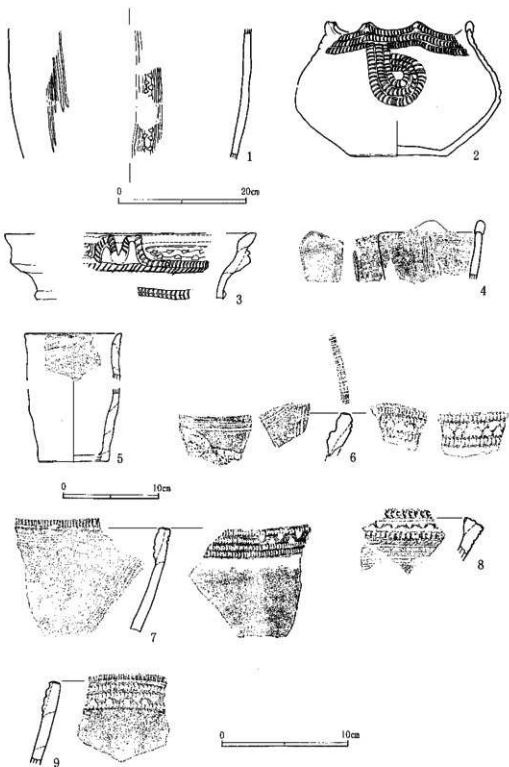
28号土坑 K-6区に位置する。長軸94cmを測る不整形プランを呈する。4号溝址調査中に溝底より検出。

29号土坑 K-7区に位置する。最大径65cmを測る小型のもので、確認面から91cmを測る。

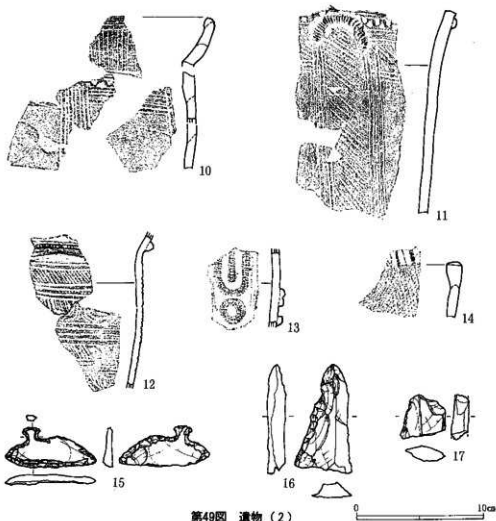
30号土坑 K-7区に位置する。3号溝址西側に設定したトレンチ中よりの検出、長軸91cm短軸82cmを測る小型のものである。



- 31号土壌 K-7区に位置する。4号溝址溝底より検出している。直径80cm以上の円形プランを呈し、深さは87cmを測る。
- 32号土壌 K-7区に位置する。長軸48cmを測る小規模な楕円形プランの土壌で深さ40cmを測る。縄文時代中期初頭の浅鉢の破片(第48図-6)が出土している。
- 33号土壌 K-7区に位置する。長軸1.58m短軸1.39mを測る楕円形プランの土壌で深さ45cmを測る。土壌上位に縄文時代中期初頭大型深鉢胴部人型破片(第48図-6)が出土していることより覆被葬の土壌墓と思われる。確認面から同一個体の小片と共に石匙(第49図-15)が出土しているが中期後葉の土器片と共に出土しているのでその帰属については疑問が残る。
- 34号土壌 L-7区に設定したトレンチ中から検出。直径60cm程の円形プランを呈する。
- 37~40・42号土壌 K・L-8区に位置する。空間的な占地、規模、覆土から一連のものとの判断。機能は不明。遺物は僅かに縄文中期の土器片等を層中に含むが、土壌の時期の決定不能。
- 44号土壌 M-11区に位置する。長軸1.40m短軸88cmを測る楕円形プランの土壌で深さは15cmを測る。空間的占地や後述する48号土壌との類似性から特に遺物はないが縄文時代中期初頭の所産と考えられる。
- 45号土壌 M-11区に位置する。長軸1.31m短軸90cmを測る。楕円形プランを呈し、深さは14cmを測る。44号土壌同様縄文時代中期初頭の所産と考えられる。
- 48号土壌 K・L-15区に位置する。長軸1.36m短軸1.11mを測る。楕円形プランを呈し、深さは21cmを測る。溝底に接して第48図-2の土器が検出されている。この土器は口縁~胴部上半1/4、以下完存する。内外面共丁寧にヘラケンマされ、波状口縁を呈する。文様は4単位見られる。土壌墓であろうか。
- 50号土壌 K-16区に位置する。長軸95cm短軸83cmを測る。不整形プランを呈する。深さは12cmを測る。
- 52号土壌 J-16区に位置する。直径1.1m前後の円形プランを呈する。深さ17cmを測る。第48図4、9が出土している。
- 53号土壌 J-15区に位置する。直径70cm以上の円形プランを呈する。深さ19cmを測る。中央を耕作により破壊されている。遺物は第48図-5、8、第49図-10、11が出土している。
- 54号土壌 J-16区に位置する。直径90cm弱の円形プランを呈する。深さは18cmを測る。一部を耕作により破壊される。遺物は第48図-7、第49図-17(打製石斧断欠)が出土している。
- 55号土壌 J-15区に位置する。直径90cm前後の円形プランを呈する。深さは10cmを測る。西側を耕作により破壊されている。遺物は第49図-16の打製石斧断欠が出土している。
- 57号土壌 I・J-16区に位置する。長軸1.77m短軸80cmを測る。楕円形プランを呈し、深さは41cmを測る。周囲の土壌に比し形態、規模共に異質である。時期を特定できる遺物もないが空間的な占地、覆土の類似性から縄文時代中期初頭の所産と考える。
- 58号土壌 I-16区に位置する。長軸76cm(現存長)短軸71cmを測る楕円形プランの土壌で、



第48圖 遺物(1)



第49図 遺物(2)

深さは15cmを測る。西側の一部を耕作により破壊されている。

60・61号土壌 I-16区に位置する。切り合うが先後関係は不明。60号土壌は直径70cm前後の円形プランを呈し、61号土壌は直径80cm以上の円形プランを呈する。深さは60号土壌が5cm、61号土壌が10cmと浅い。61号土壌底部には小ピットが穿たれている。遺物は60号土壌から第49図-12、13(同一個体)が、61号土壌から第48図-3が出土している。

62号土壌 I-16区に位置する。長軸86cm短軸78cmを測る楕円形プランを呈する。深さ17cmを測る。無文深鉢胴部片を検出。特徴的な胎土から縄文時代中期初頭の所産と考えられる。

64号土壌 I-16区に位置する。長軸80cm短軸65cmを測る。楕円形プランを呈する。深さは12cmを測る。第49図-14の土器片が出土している。

65号土壌 I-16区に位置する。長軸92cm短軸76cmを測る。深さ23cmを測る。楕円形プランを呈する。

### 3 その他の遺構と遺物

#### a 溝址 (第50・51図)

ここで扱った溝址としたものは斜面上部一下部の主軸を取り、覆土中に砂や砂利の単一層が部分的に見られることから実際に水流のあったものである。また、覆土の堆積から川のような水流の継続期間の長期に渡るものではないのも確実であることからここでは溝址として調査を進めた。

1号溝址 K-10区を流下する。田圃請時の削平を受けている。先端部の北側にはこの溝址の底部の痕跡と思われる小ピットが確認されている。最大幅1.46mを測る。

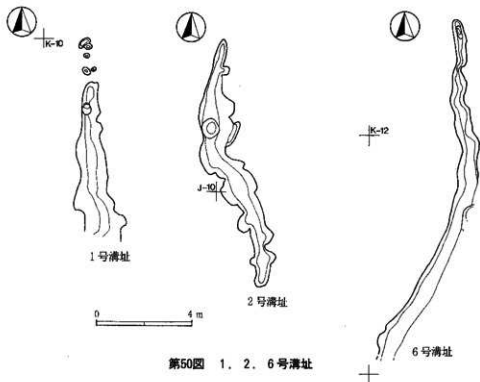
2号溝址 I・J-10区からI-11区に流下する。底部は小ピット状に凹みが連続し不製面を呈する。最大幅1.54mを測る。

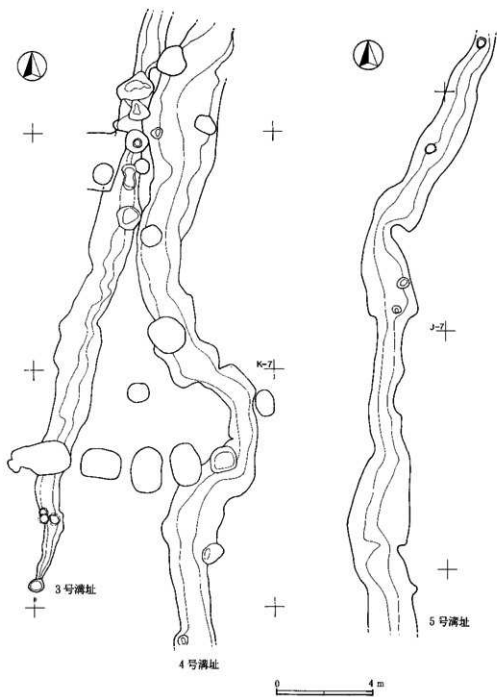
3号溝址 K-6区からK-8区に直線的に流下する。4号溝址と切り合うが先後関係は不明。底面は上位～中位までは凹凸が激しく不製面を呈するが、下半はフラットになっている。

4号溝址 K-6区からK-7区まで流下する。途中でコの字状に屈曲する。底面は比較的フラットな面が連続する。最大幅3.18mを測る。

5号溝址 I-6区から南西方行に流下しJ-7区で屈曲してJ-9区に至る。位置関係より2号溝址の上流に当たるか。最大幅2.56mを測る。

6号溝址 K-12・13区を流下する。位置関係より1・3号溝址と同一の遺構であろうか。最大幅86cmを測る。





第51图 3~5号沟址

## b 包含層 (第52図)

尾根東側沖積面を一部重機により岩盤まで掘削したが、この部分の土層について概述する。1層は褐色上層である。拳大～人頭大の石を稀に混入する。平安時代のもと思われる落ち込みがこの上層を切って構築している。(調査は行っていないので詳細は不明。) 2層は黒褐色土層で粘性、しまり共にやや弱い。3層は褐色上層で、小石を多含する。4層は黒褐色上層でしまりがやや弱い。今回は確認できなかったが試掘調査でこの層に比定される土層中から縄文時代中期初頭の遺物が検出されている(第53図-13)。このことからこの時期尾根東側は比較的に急な崖面を形成していたことが解る。4B層は4A層とほぼ同質の上層ではあるが、拳大～人頭大の石を多含する。5層は黒褐色土層でしまりが強い。6層は褐色上層で粘性、しまり共に強い。7層は黒褐色土層で粘性普通、しまりやや強い。8層は黒褐色土層で粘性、しまり共に強い。砂質土の沈澱層。9層は褐色上層でしまり強く、小石を多含する。

## c 遺構外出土の遺物

ここでは溝址や掘居時期の不明な土壌からの出土遺物も含めて記述する。

第53図には縄文時代前期後葉～中期初頭の遺物を提示した。1は諸磯B式に比定される深鉢胴部片で磨減が顕著。2～4は諸磯C式に比定される。2、3は深鉢口縁部片で、3は波状を呈する。5～20は中期初頭の遺物である。5、6は浅鉢の口縁部片である。共に内面に竹管文が見られる。7～20は深鉢である。19はいわゆるトロフィー形の深鉢であろう。

第54図-21～23は井戸尻式に比定される。全て深鉢で1、2は口縁部片である。

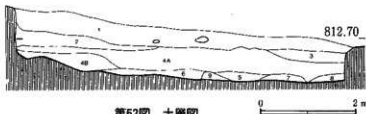
24～28は曾利I式に比定される。何れも深鉢である。

29～37は中期終末曾利V式に比定される。29は波状口縁を呈する深鉢である。地文はハの字文である。30、31は押し引き文を地文に持つもので、30は沈線で、31は隆帯で区割される。34～37は沈線区割の後、縄文が充填されるものである。34は口唇部にI.Rが施文されている。

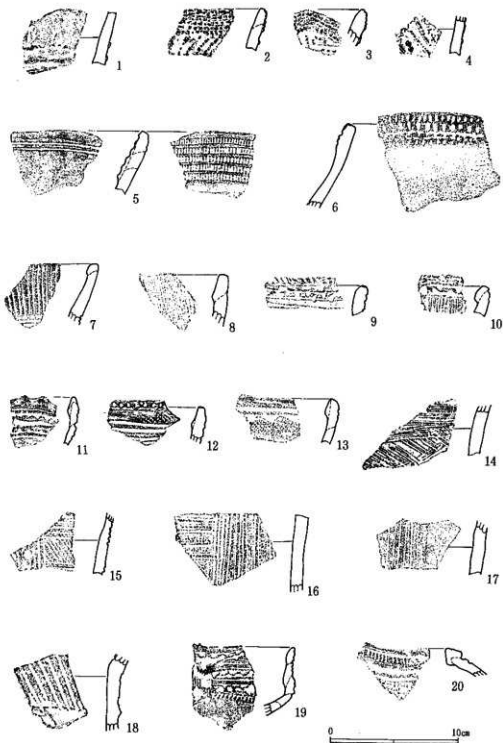
38は縄文後期の所産であろうか。39は縄文晩期終末水I式に併行するものである。口縁部に山形小突起が貼り付けられている。

第55図には石器を提示した。1は黒曜石製の石鏃で、本遺跡中唯一のものである。最大長1.7cm、最大幅1.4cmを測る。2は黒曜石製の楔形石器、3は黒曜石製の使用痕のある剥片である。裏面に使用による擦痕が顕著に見られる。4～6は打製石器である。4はホルンフェルス製、6は粘板岩製のもので、6は使用によるテカリが観察されている。

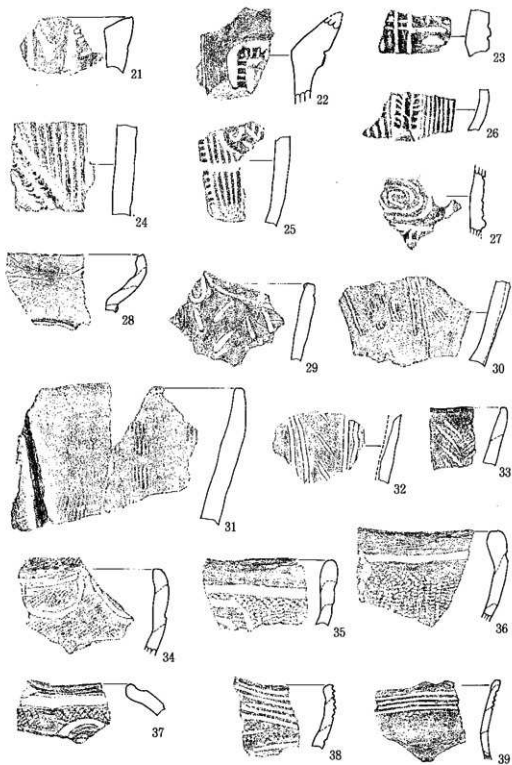
図示していないが中世に属する砥石と五輪塔(火輪)が出土している。



第52図 土層図



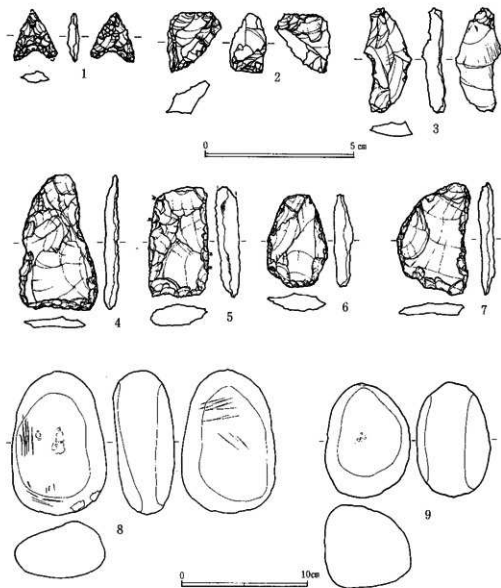
第53图 遺物(1)



第54圖 遺物(2)

0 10cm





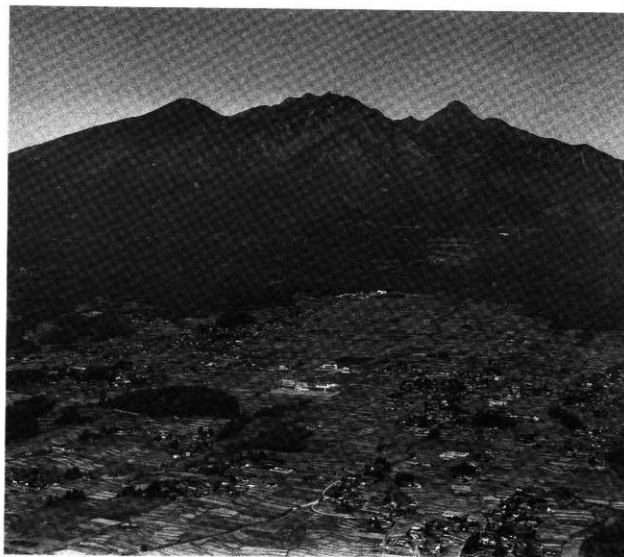
第55図 遺物(3)

### 3 小 結

宮地第3遺跡は非常に広範囲に渡って調査が行われたので集落の占地を考える上で重要な成果を上げることができた。特に縄文時代中期初頭については顕著である。今後の調査、研究活動に資することができればと思う。

参考文献

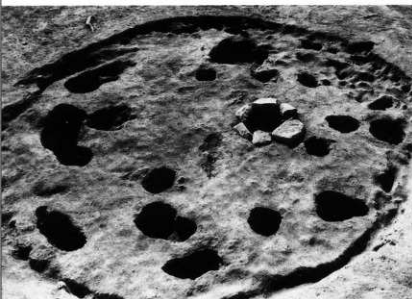
- 雨宮正樹 1984 『東久保遺跡』高根町教育委員会  
 雨宮正樹 1985 『旭東久保遺跡』高根町教育委員会  
 伊藤公明 1988 『方城第1遺跡』大泉村教育委員会、東北土地改良事務所  
 伊藤公明 1989 『大和田、大和田第2遺跡』大泉村教育委員会、東北土地改良事務所  
 大森隆志 1990 『千野木Ⅰ・Ⅱ、池の下、蕨石Ⅱ、中村造祖神遺跡』明野村教育委員会  
 岡村範之 1985 『小和田館跡』長坂町教育委員会  
 折井 敦 1990 『教来石民部館跡』白州町教育委員会  
 唐木孝雄他 1986 『契久保遺跡』岡谷市教育委員会  
 藤原功一 1985 『東姥神B遺跡』大泉村教育委員会、東北土地改良事務所  
 藤原功一 1986 『豆生田第3遺跡』大泉村教育委員会、東北土地改良事務所  
 藤原功一 1987 『姥神遺跡』大泉村教育委員会、東北土地改良事務所  
 佐野勝広 1983 『木ノ下・大坪遺跡』大泉村教育委員会、光洋電子工業㈱  
 佐野勝広 1984 『沢の田遺跡』大泉村教育委員会、東北土地改良事務所  
 末木 健他 1974 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡小淵沢町地内—』  
 末木 健他 1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂、明野、葦峰地内—』  
 鈴木治彦 1986 『小和田館跡(小和田北遺跡)』長坂町教育委員会、東北土地改良事務所  
 田代 孝 1987 『郷蔵地遺跡』山梨県教育委員会、山梨県土木部  
 新津 健 1989 『金生遺跡Ⅱ』山梨県教育委員会  
 平野 修 1985 『板古屋遺跡』白州町教育委員会、東北土地改良事務所  
 八巻与志夫 1988 『金牛遺跡Ⅰ』山梨県教育委員会  
 山路恭之助 1986 『川又南遺跡』須玉町教育委員会、東北土地改良事務所  
 山路恭之助 1987 『津金御所前遺跡』須玉町教育委員会  
 山本茂樹 1990 『4. 甲ヶ原遺跡』『年報』6 山梨県埋蔵文化財センター  
 山梨大学考古学研究所 1978 『御所遺跡発掘調査報告』  
 山梨大学考古学研究所 1981 『御所遺跡—第2次発掘調査報告書』  
 米田明訓他 1986 『柳坪遺跡』山梨県教育委員会、日本道路公団



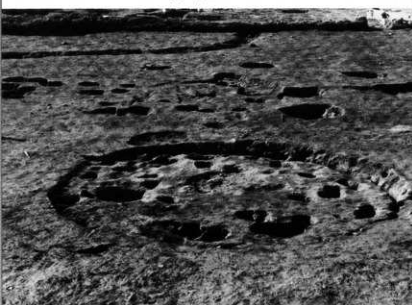
遺跡位置圖 (1. 宮地第2遺跡、2. 宮地第3遺跡)



2号住居址



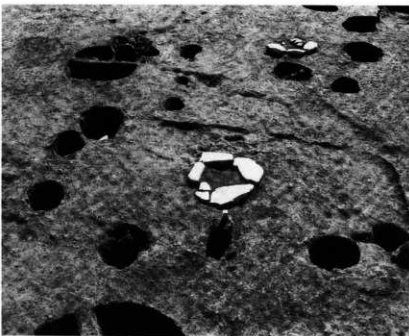
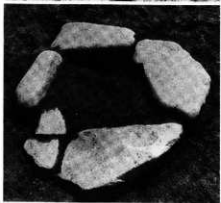
3号住居址



3号住居址近景



4号住居址



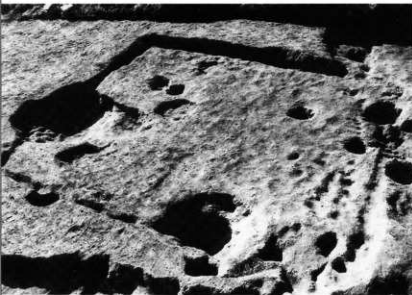
5号住居址

6号住居址





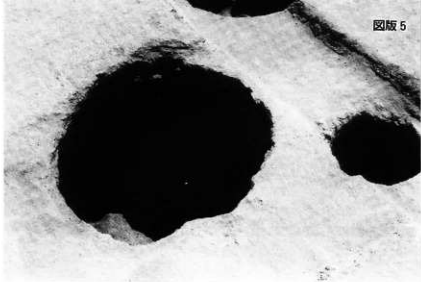
7号住居址



8号住居址



7・8号住居址近景



1号地下式墳



2号地下式墳



3号地下式墳





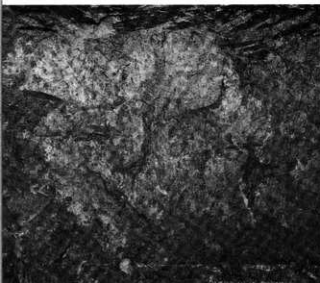
4号地下式墳



5号地下式墳 閉塞



6号地下式墳 閉塞



5号地下式墳 地下室

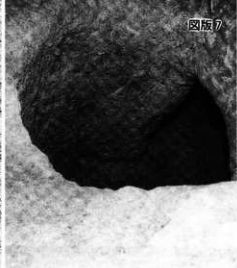


6号地下式墳 地下室

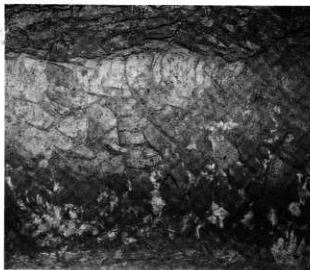




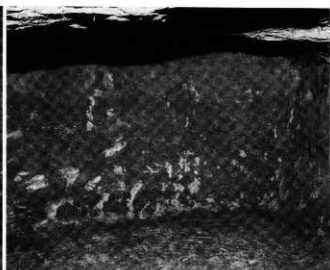
7号地下式墳 閉塞



C地下室 開口



A地下室



B地下室



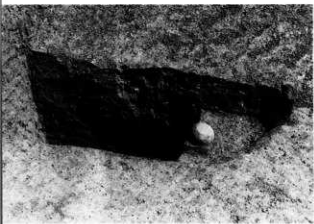
8号地下式墳 地下室



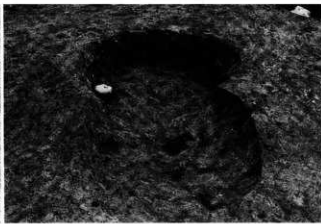
4号土坑



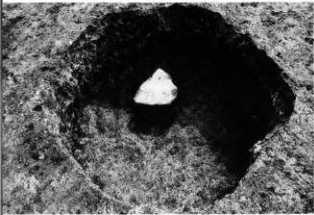
5・6号土坑



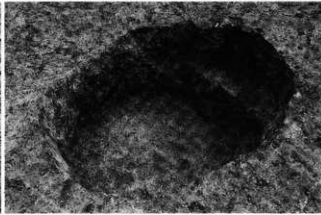
8号土坑



16・17号土坑



18号土坑



19号土坑



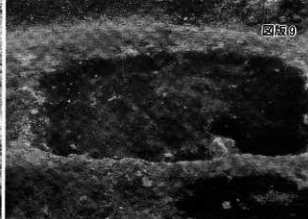
30号土坑



34号土坑



35号土坑



63号土坑



92号土坑



97号土坑



101・102号土坑



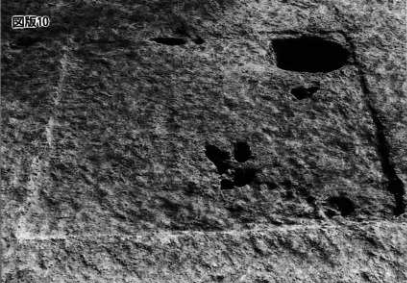
117号土坑



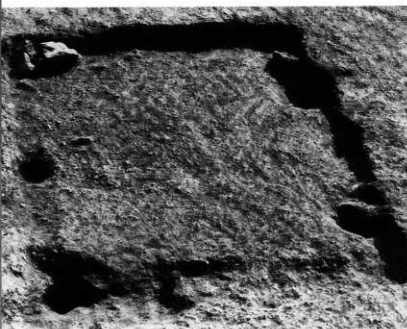
144・145号土坑



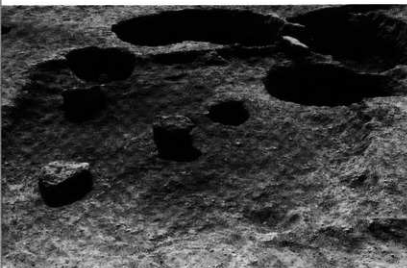
151号土坑



1号小竪穴



2号小竪穴



3号小竪穴

2号溝状遺構



2～5号溝状遺構



掘立柱建物址



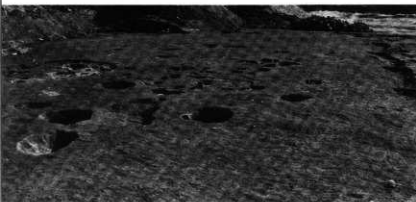
遺跡近景



図版12



遺跡近景



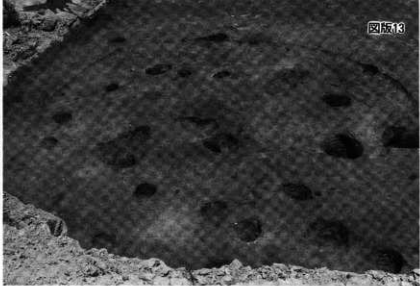
遺跡近景



遺跡近景



遺跡近景



1号住居址



2号住居址



31号土坑

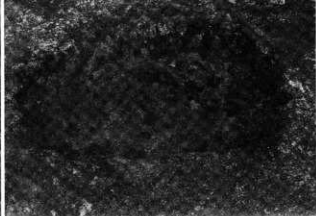


33号土坑

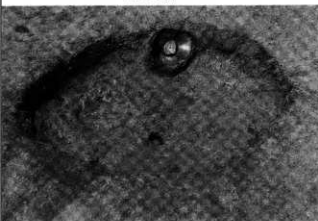
図版14



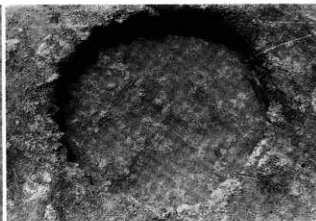
44号土坑



45号土坑



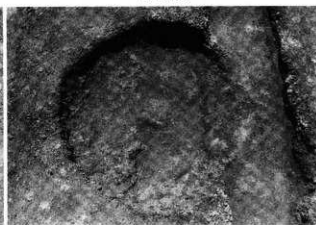
48号土坑



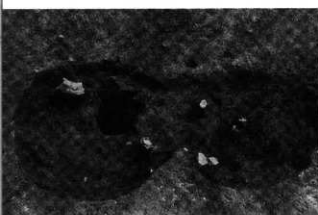
52号土坑



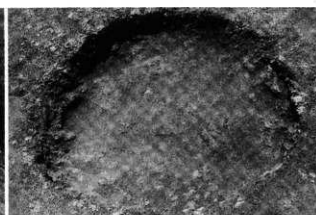
53号土坑



58号土坑



60・61号土坑



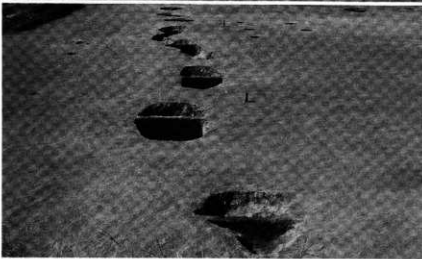
65号土坑



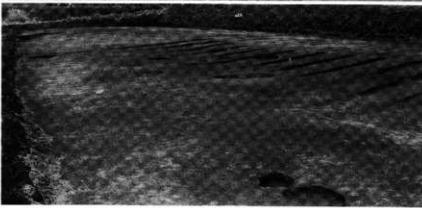
10~16号土壇



16~22号土壇



48~64号土壇



2号溝址





3・4号溝址



5号溝址



包含層断面

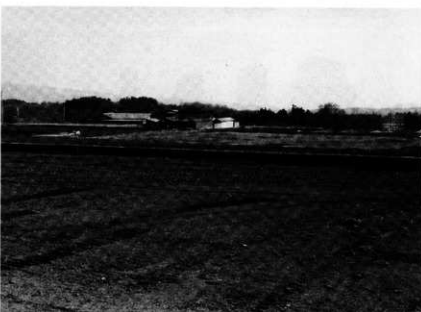
遺跡近景



作業風景

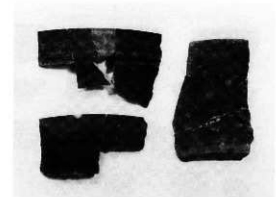


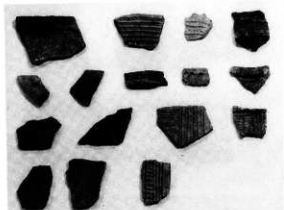
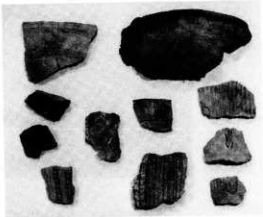
遺跡現況





宮地第2遺跡 3号住居址出土遺物





---

大泉村埋蔵文化財調査報告書 9集

発行 平成3年3月31日発行

編集 大泉村教育委員会

〒409-15

山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025

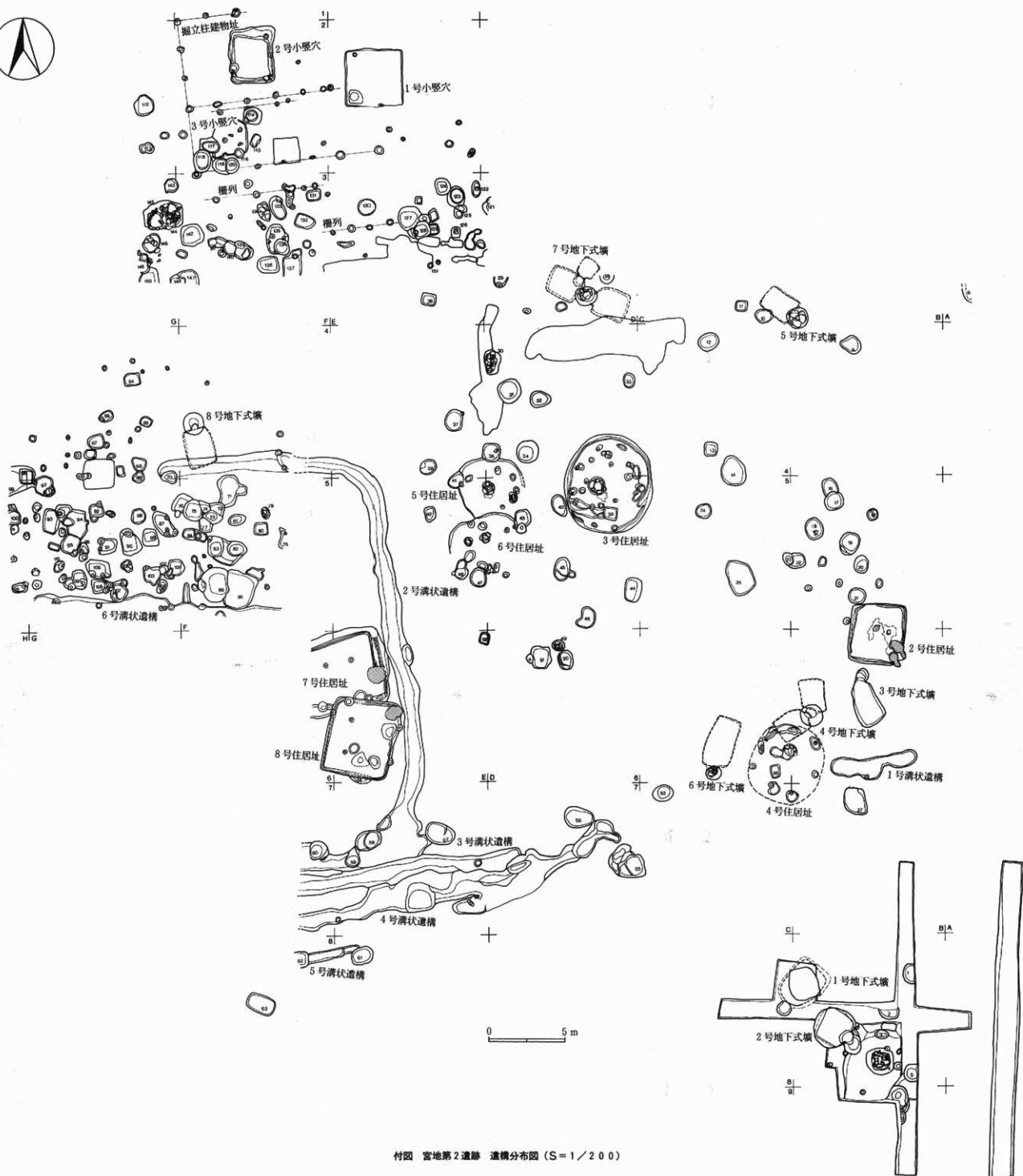
TEL 0551-38-3115

印刷 働ヨネヤ印刷

甲府市丸の内一丁目14-6

TEL 0552-35-4311 ㊞

---



附图 宫地第2道跡 遺構分布图 (S=1/200)



